

ISSN 0918-3728

東京家政学院生活文化博物館

年 報

第 33 号



2024

東京家政学院生活文化博物館

年 報

第 33 号

2 0 2 4



七段飾りの雛人形 東京家政学院蔵

東京家政学院生活文化博物館

年 報

第 33 号

目 次

口絵

目次

英文目次

はじめに	1
I 令和4年度博物館委員	2
II 令和4年度受贈資料目録	2
III 令和4年度購入資料目録	3
IV 令和4年度貸出資料目録	3
V 令和4年度受贈図書目録	4
VI 令和4年度展示研究報告	
(1) 令和4年度企画展「“つくる”を育む～令和と昭和の学生たち～」	川 本 利 恵 14
(2) 令和4年度企画展「完成までの道のり～資料の製作工程～」	川 本 利 恵 18
(3) 令和4年度第34回特別展「祈りの形—上巳と端午の節句飾り—」	川 本 利 恵 22
(4) 令和4年度企画展「学生成果展」	各担当教員 29
(5) 令和4年度企画展「教員研究成果展」	各担当教員 41
(6) 展示協力報告	川 本 利 恵 45
VII 博物館実習報告	
・令和5年度博物館実習の実施について	加 藤 晴 美 47

令和4年度生活文化博物館日誌抄	51
東京家政学院生活文化博物館規程	52
東京家政学院生活文化博物館委員会規程	53
東京家政学院生活文化博物館運営規程	55

Annual Bulletin of the Museum of Daily Life Tokyo Kasei Gakuin

Number 33, March 2024

Contents

Preface	1
I Museum of Daily Life Committee Personnel, in 2022	2
II Donations Received in 2022	2
III New Museum Acquisitions in 2022	3
IV Lending of Collections in 2022	3
V Books Donated in 2022	4
VI Exhibition Reports	
(1) Planned exhibition in fiscal year 2022: Developing manufacturing technique; Students in Showa and Reiwa period	KAWAMOTO Rie 14
(2) Planned exhibition in fiscal year 2022: The Path to Completion: Process of making exhibits	KAWAMOTO Rie 18
(3) Planned Exhibition in fiscal year 2022: Forms of Prayer: Decorations for Girls' Festival and for Boys' Festival	KAWAMOTO Rie 22
(4) Works by Senior Students	29
(5) Works by Teacher's Achievement	41
(6) A Collaborative Exhibition about Contributors and Donations	KAWAMOTO Rie 45
VII Student Practice in Museology Reports	
• Training in Museology in fiscal year 2023	KATO Harumi 47

Excerpts from the 2022 Museum Journal	51
Museum Regulations	52
Regulations of the Committee of the Museum	53
Museum Operational Regulations	55

はじめに

本号では、令和4（2022）年4月から令和5年3月に東京家政学院生活文化博物館で開催した諸事業の成果と令和5年度博物館実習を報告します。当該年度内には、大きく分けて5つの企画展と、秋期に実施した博物館実習及び博物館実習生による展示実習展を実施しました。また、秋から春の長期に渡る特別展においては、例年のように千代田三番町キャンパスでも同内容を紹介するパネル展示を開催するなど、学生や地域への幅広い寄与をめざす活動を展開しています。

年度冒頭と年度末にそれぞれ開催した「学生成果展」「教員研究成果展」（第12回企画展、第15回企画展）では、学生による多くの実践活動報告と教員の研究成果が報告展示されました。感染症対策が続く中でも、幅広い実践フィールドや専門性は来館者を魅了しました。特に、街へ出る、異学年や世代間、地域文化や社会産業と関わるといった多様なフィールドを往来する学びと研究は、本学の精神文化をそのまま照らしたコンテンツともいえるでしょう。

令和4年5月30日から7月29日まで開催した第13回企画展「“つくる”を育む～令和と昭和の学生たち～」では、創設者大江スミ先生が重んじた「モノづくりを支える企画構想・実践力」に着目し、昭和30年代の学生から今に引き継がれる「つくる」精神態度にフォーカスしました。旧短大時代の卒業生から寄贈された作品などを通して知ることのできる本学の歴史的背景こそ、オープンキャンパスに訪れる高校生にも紹介したいという期待を含んだ構想です。一方、11月7日から2月3日まで開催した第34回特別展「祈りの形―上巳と端午の節句飾り―」は、健やかな成長を祈る「節句」にまつわる人形や錦絵など、70点近い資料を3部構成で展示しました。この特別展における資料の精選と丁寧な企画・展示は、町田市・相模原市のタウン誌『町田ショッパー』（令和5年新年号）や、朝日新聞社『定年時代』（令和5年1月23日発行）などに取材を受け、掲載されました。

こうした企画展示のそれぞれが、学院創設100周年記念事業の特別展への呼び水になったことは当然ですが、こうした事業の努力と成果がより多くの方々の関心を呼ぶ機会となることを祈念します。

令和6年3月

東京家政学院大学生生活文化博物館館長
立 川 泰 史

I 博物館委員

令和4年度（2022.4.～2023.3）

役職・所属（学部学科）			氏 名	適用条項
博物館長			立 川 泰 史	第3条第1項第1号
学芸員教育委員会委員長			加 藤 晴 美	第3条第1項第2号
大 学	現代生活学部	現代家政学科	大 橋 竜 太	第3条第1項第3号
		生活デザイン学科	佐々木 麻紀子	第3条第1項第3号
		食物学科	高 尾 純 宏	第3条第1項第3号
		児童学科	齋 藤 義 雄	第3条第1項第3号
	人間栄養学部	人間栄養学科	坂 野 史 明	第3条第1項第3号
大学院		人間生活学研究科	上 園 薫	第3条第1項第3号
副学長			山 村 明 子	第3条第1項第4号
研究員			井 澤 尚 子	第3条第1項第5号
研究員			深 石 圭 子	第3条第1項第5号
研究員			高 尾 純 宏	第3条第1項第5号
研究員			正 地 里 江	第3条第1項第5号
事務局員（千代田三番町キャンパス）			仲 真 司	第3条第1項第6号
事務局員（町田キャンパス）			佐 藤 靖 子	第3条第1項第6号

II 受贈資料目録

令和3年（2021.1～2021.12）受贈資料目録補遺

寄贈者	品名	点数	受入日
藤 居 真理子	手ぬぐい	31	2021年12月20日
	風呂敷	22	
	帯揚げ	35	
	半衿	13	
	帯締め	16	
	帯留め	31	
	帯留め付帯締め	1	
	帯締め金具	2	
	フック	1	
	組紐	1	
	スカーフ	1	
	長着	14	
	長着・羽織一組	1	
	長着一式	1	
	羽織	2	
	羽織紐	1	
	長襦袢	1	
	祝着	1	
	初着	1	
	初着一組	1	
	袴	1	
	和装コート	1	
	和装バッグ	1	
	草履	5	
	雛形	1	
	もんぺ	2	
	振袖	2	
	訪問着	1	
	帯	5	
	袋帯	1	
	帯（3点揃え）	1	
	帯枕	1	
	帯紐	3	
	衿芯	1	
	端切れ	1	

織見本	1
染色見本	2
刺繍見本	1
和染下着見本	1
着物生地見本	1
着物生地見本パンフレット	1
振袖パンフレット	1
鯨小紋生地見本	1
着物生地模様見本	2
文部省検定済教科書	1
扇子	4
櫛	32
簪	20
櫛・簪揃え	5
筭	15
櫛・筭揃え	6
髪留め	26
根付	1
袱紗	9
色見本帳	4
水引細工	4
絵馬	1
秤	1
ペンダント	1
ペンダントヘッド	1
皿	2
竹ものさし	1

Ⅲ 購入資料目録

令和4年（2022.1～2022.12）

品名	点数	資料番号
雛人形と武者人形	7	2022 - 01

Ⅳ 貸出資料一覧

令和4年度（2022.4～2023.3）

貸出先	資料名	点数	貸出期間	利用目的
江原絢子	鋤焼き画像データ ふのやき画像データ	1 1	令和4年10月	『南方熊楠 works』第60号 「第32回南方熊楠賞受賞記念講演」にける江原絢子「自然を尊重するなかで育まれた日本の食」に掲載
レースミュージアム【LOOP】	クンストレース絵 「フラメンコ」	1	令和4年12月 3日～11日	石川なごみ クンストレース作品展 展示内容：クンストレース額絵、編み図ブック
京都「JARFO」	クンストレース絵 「見返り美人」	1	令和5年3月 28日～令和5 年4月15日	アートスペース「JARFO」での春のクンストレース・特別企画展「LILYLACE×ミュージアム【LOOP】×嵯峨美術大学×クンストレース企画」に展示利用。 会期：令和4年3月31日（金）～令和4年4月12日（水） 内容：石川なごみ作のクンストレース作品や図案の展示

V 受贈図書目録

令和4年度（2022.4～2023.3）

寄 贈・発 行 者	発行年	書 名（巻・号）
ICOM-DRMC 2021 実行委員会	2022	ICOM-DRMC 年次大会2021 報告書 ICOM-DRMC Annual Conference 2021 Report
青森県立郷土館	2022	青森県立郷土館報 通巻49号（2022年度）
青山学院大学文学部史学研究室	2022	青山史学 第40号 —藤原良章教授退任記念号—
飛鳥資料館	2022	飛鳥資料館図録第75冊 高松塚古墳壁画発見50周年・奈良文化財研究所70周年 令和4年度秋期特別展「飛鳥美人 高松塚古墳の魅力」
飛鳥資料館	2023	飛鳥資料館令和4年度 冬期企画展 カタログ第39冊 飛鳥の考古学2022
足立区立郷土博物館	2022	足立区立郷土博物館だより No.76
板橋区教育委員会	2022	歴史民俗研究 第20回櫻井徳太郎賞受賞論文・作文集
出光美術館	2022	出光美術館研究紀要 第27号
出光美術館	2022	出光美術館 館報第194号
出光美術館	2023	出光美術館館報 第195号
伊能忠敬記念館	2022	伊能忠敬記念館年報 第23号 令和2年度
印刷博物館	2022	印刷博物館ニュース Printing Museum News 季刊第84号
印刷博物館	2022	印刷博物館ニュース Printing Museum News 季刊第85号
印刷博物館	2022	印刷博物館ニュース Printing Museum News 季刊第87号
浦幌町立博物館	2021	浦幌町立博物館年報 第22号
浦幌町立博物館	2022	浦幌町立博物館紀要 第22号
浦幌町立博物館	2022	浦幌町立博物館だより 2022（令和4）年4月号
江戸東京たてもの園	2022	江戸東京たてもの園だより 59
江戸東京たてもの園	2022	江戸東京たてもの園だより 60
鷹陵史学会	2022	鷹陵史学 第48号
大磯町郷土資料館	2022	年報 —令和3年度—
大磯町郷土資料館	2022	島崎藤村と大磯を愛した文人たち
大阪大谷大学博物館	2022	大阪大谷大学博物館報告書 第69冊 河内国丹南郡南嶋泉村 松村家文書目録
大阪大谷大学博物館	2022	博物館だより No.133
大阪歴史博物館	2022	大阪歴史博物館年報 令和3年度
お札と切手の博物館	2022	お札と切手の博物館ニュース Vol.50
お札と切手の博物館	2022	お札と切手の博物館ニュース Vol.51
学習院大学 学芸員課程委員会	2022	学芸員 BULLETIN FOR CURATOR'S COURSE No.26
九州産業大学美術館	2023	令和4年度文化庁 InnovateMUSEUM 事業 高齢者をつなぐ美術館と医療・福祉施設、行政機関、公民館、 他の博物館との連携事業 事業報告書
甲斐黄金村・湯之奥金山博物館	2022	博物館だより 第99号
甲斐黄金村・湯之奥金山博物館	2022	甲斐黄金村・湯之奥金山博物館だより 第100号
甲斐黄金村・湯之奥金山博物館	2022	甲斐黄金村・湯之奥金山博物館だより 第101号
甲斐黄金村・湯之奥金山博物館	2023	甲斐黄金村・湯之奥金山博物館だより 第102号
学習院大学史料館	2022	学習院大学史料館紀要 第28号
家具の博物館	2022	博物館だより No.82
家具の博物館	2023	博物館だより No.83
葛飾区郷土と天文の博物館	2022	博物館だより No.132
葛飾区郷土と天文の博物館	2022	博物館だより No.133
葛飾区郷土と天文の博物館	2022	博物館だより No.134
葛飾区郷土と天文の博物館	2022	葛飾おうち博物館 博物館だよりジュニア —2022年夏・特別号—

寄 贈・発 行 者	発行年	書 名 (巻・号)
葛飾区郷土と天文の博物館	2023	令和4年度企画展 東京低地に人が住み始めた頃 —古墳時代前期のかつしかとその周辺—
かながわ考古学財団	2022	研究紀要27 かながわの考古学
株式会社RNA・トキオ文化財株式会社	2022	港区内近世都市江戸関連遺跡発掘調査報告93〔TM217〕薩摩鹿児島藩 島津家屋敷跡第3遺跡発掘調査報告書 —(仮称)GD芝公園新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—
株式会社クマヒラホールディングス	2023	抜萃のつづり その八十二
株式会社 玉川文化財研究所	2023	神奈川県藤沢市 藤沢市北部第二(三地区)土地区画整理事業区域内 遺跡群 発掘調査報告書 一下土棚諏訪ノ棚遺跡第5・6次調査—
川越市立博物館	2022	川越市市制施行100周年記念特別展 川越なつかし写真館
関西学院大学博物館	2022	美術と文芸シリーズ 新収蔵品展 洋画家 大森啓助コレクション展
関西大学なにわ大阪研究センター	2022	2020年度・2021年度関西大学なにわ大阪研究センター 研究プロジェクト研究成果報告書 SPレコード(松本コレクション)のデータベース作成と分析
関西大学博物館	2022	津田秀夫文庫古文書・和本目録
北九州市立自然史・歴史博物館	2022	北九州市立自然史・歴史博物館 研究報告 B類 歴史 第19号
北区飛鳥山博物館	2021	北区飛鳥山博物館だより ぼいす47
北区飛鳥山博物館	2022	北区飛鳥山博物館だより ぼいす48
北区飛鳥山博物館	2022	北区飛鳥山博物館だより ぼいす49
北区教育委員会	2022	北区飛鳥山博物館研究紀要 第24号
北区教育委員会	2022	幻想の江戸 —異文化のまなざしに映った他者・表象・言説—
北区教育委員会	2022	秋期企画展 縄文料理と弥生ごはん
岐阜県博物館	2022	岐阜県博物館報 第45号
岐阜県博物館	2022	岐阜県博物館調査研究報告 第42号
岐阜県博物館	2022	パレオアート作品展 —二人のパレオアーティスト—
九州産業大学美術館	2022	令和2・3年度 九州産業大学美術館 年度報告書 No.10
九州歴史資料館	2022	九州歴史資料館 研究論集 47
九州歴史資料館	2022	九歴だより No.55
九州歴史資料館	2022	九歴だより No.56
旧石器ハテナ館	2022	尖頭器 第42号
旧石器ハテナ館	2022	尖頭器 第43号
行田市郷土博物館	2022	行田市郷土博物館報 第21号
行田市郷土博物館	2022	開館35周年記念 第35回企画展 天生十八年 ～関東の戦国から近世～
行田市郷土博物館	2022	開館35周年記念 第35回テーマ展 縄文・弥生の足あと —古墳以前の行田を知る—
京都工芸繊維大学美術工芸資料館	2022	2020年度 京都工芸繊維大学美術工芸資料館年報 29
京都大学総合博物館	2022	京都大学総合博物館年報 令和3年度(2021年度)
京都大学総合博物館	2022	京都大学総合博物館収蔵資料目録 第9号 楔形文字粘土板
京都大学総合博物館	2022	京都大学総合博物館ニュースレター No.54
京都大学総合博物館	2022	京都大学総合博物館ニュースレター No.55
京都大学総合博物館	2022	京都大学総合博物館ニュースレター No.56
共立女子大学博物館	2023	2022 共立女子大学博物館 年報／紀要 第6号
Great Eagle Tokyo TMK・株式会社パ スコ	2021	港区内近世都市江戸関連遺跡発掘調査報告書84〔TM187〕湖雲寺跡 遺跡 —宿泊施設建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書— 第1分冊
Great Eagle Tokyo TMK・株式会社パ スコ	2021	港区内近世都市江戸関連遺跡発掘調査報告書84〔TM187〕湖雲寺跡 遺跡 —宿泊施設建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書— 第2分冊
皇學館大学研究開発推進センター	2021	令和2年度 皇學館大学研究開発推進センター年報 第8号
皇學館大学研究開発推進センター	2022	令和2年度 皇學館大学研究開発推進センター紀要 第8号

寄 贈・発 行 者	発行年	書 名 (巻・号)
高知県立高知城歴史博物館	2022	高知県立高知城歴史博物館 JOHAKU NEWS Vol.17
高知県立高知城歴史博物館	2022	高知県立高知城歴史博物館 JOHAKU NEWS Vol.18
高知県立高知城歴史博物館	2022	高知県立高知城歴史博物館 JOHAKU NEWS Vol.19
高知県立高知城歴史博物館	2023	高知県立高知城歴史博物館 JOHAKU NEWS Vol.20
高知県立歴史民俗資料館	2022	高知県立歴史民俗資料館開館30周年記念誌
高知県立歴史民俗資料館	2022	岡豊風日 第116号
高知県立歴史民俗資料館	2022	岡豊風日 第117号
高知県立歴史民俗資料館	2022	岡豊風日 第118号
高知県立歴史民俗資料館	2023	岡豊風日 第119号
古河歴史博物館	2022	古河歴史博物館年報 Vol.30 令和2年度
古河歴史博物館	2022	古河歴史博物館紀要 泉石 第15号
國學院大學博物館	2023	國學院大學博物館研究報告 第39輯
國學院大學博物館学研究室	2022	國學院大學 博物館學紀要 第46輯
國學院大學博物館学研究室	2023	國學院大學 博物館學紀要 第47輯
國學院大學博物館学研究室	2022	Musette—國學院大學博物館學研究 第1号
國學院大學博物館学研究室	2023	國學院大學博物館學研究 第2号
国士舘大学イラク古代文化研究所	2022	ラーフィダーン 第XLⅢ巻 2022
国文学研究資料館・古典籍共同研究事業センター	2022	ふみ「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」 ニューズレター 第18号
国文学研究資料館・古典籍共同研究事業センター	2023	ふみ「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」 ニューズレター 第19号
国立近代美術館	2021	国立工芸館石川移転開館記念展Ⅲ 近代工芸と茶の湯のうつわ —四季のしつらい—
国立近代美術館	2021	国立工芸館石川移転開館1周年記念展 《十二の鷹》と明治の工芸 —万博出品時代から今日まで変わりゆく姿
国立近代美術館	2021	めぐるアールヌーヴォー展 モードのなかの日本工芸とデザイン
国立新美術館	2022	国立新美術館研究紀要 第8号
国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室	2022	国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室 紀要4
国立ハンセン病資料館	2023	資料館だより No.118
国立文化財機構文化財活用センター	2022	文化財活用センター 3周年記念 2021年度公開シンポジウム 「ミュージアムをめぐるファンドレイジング」 報告書
古代歴史文化協議会	2022	刀剣 —武器から読み解く古代社会—
國華清話会・國華社	2022	「國華清話会」会報 第39号 令和4年春刊
國華清話会・國華社	2022	國華清話会会報 第40号
駒澤大学禅文化歴史博物館	2021	企画展 書でたどる良寛の足跡
駒澤大学禅文化歴史博物館	2021	駒沢大学禅文化歴史博物館紀要 第5号 (令和2年度)
駒澤大学禅文化歴史博物館	2023	駒沢大学禅文化歴史博物館紀要 第6号 (令和3年度)
相模原市	2021	相模原市埋蔵文化財発掘調査64 宮下本町三谷遺跡 —個人住宅建設事業に伴う発掘調査報告書—
相模原市	2022	相模原市埋蔵文化財発掘調査67 長竹舟久保遺跡 第3地点 —高度処理型浄化槽設置工事に伴う発掘調査報告書—
相模原市教育委員会	2021	相模原市埋蔵文化財発掘調査65 苦久保遺跡 第7・8地点 —個人住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査—
相模原市教育委員会	2021	相模原市埋蔵文化財発掘調査66 田名向原遺跡 第6次調査 —個人住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査—
相模原市教育委員会	2022	相模原市埋蔵文化財発掘調査69 相模原市登録史跡 大島中ノ郷のヤツボ —史跡保存目的の測量調査—

寄 贈・発 行 者	発行年	書 名 (巻・号)
相模原市教育委員会	2022	相模原市埋蔵文化財調査報告 70 上溝久保ヶ谷戸遺跡 第5地点 —集合住宅建設に伴う発掘調査報告書—
相模原市教育委員会	2022	相模原市埋蔵文化財調査報告 71 川坂遺跡 第6次調査 —個人住宅建設に伴う発掘調査報告書—
相模原市教育委員会	2022	相模原市埋蔵文化財調査報告 72 上溝久保遺跡 —宅地造成に伴う発掘調査報告書—
相模原市教育委員会・相模原市立博物館	2022	相模原市埋蔵文化財発掘調査 68 川坂遺跡第3次調査 —旧津久井町道 1-1 号道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—
サントリーホール	2022	サントリーホール情報誌『Hibiki』 Vol.18
サントリーホール	2022	サントリーホール情報誌『Hibiki』 Vol.19
サントリーホール	2023	SUNTORY HALL PRESENTS サントリーホール主催公演 2023-24
サントリー美術館	2022	サントリー美術館ニュース vol.288
サントリー美術館	2022	サントリー美術館ニュース vol.289
サントリー美術館	2022	サントリー美術館ニュース vol.290
サントリー美術館	2023	サントリー美術館ニュース vol.291
サントリー美術館	2023	サントリー美術館ニュース vol.292
室礼研究会・ゆずり葉	2019	日本の年中行事と室礼
実践女子大学香雪記念資料館	2022	実践女子大学香雪記念資料館館報 第19号 (令和3年度)
島根県教育委員会	2022	島根県古代文化センター調査研究報告書 57 荒神谷遺跡青銅器群の研究
島根県教育委員会	2022	島根県古代文化センター研究論集 第27集 山陰における古代交通の研究
島根県教育委員会	2022	島根県古代文化センター研究論集 第28集 中世岩見における在地領主の動向
島根県教育委員会	2022	古代文化研究 第30号
島根県教育委員会	2022	出雲国風土記 —地図・写本編—
島根県立古代出雲歴史博物館	2022	島根県立古代出雲歴史博物館 令和3 (2021) 年度 年報 Annual Report 2021
島根県立古代出雲歴史博物館	2022	島根県立古代出雲歴史博物館開館15周年記念 特別展 図録 ハニワの世界へようこそ
島根県立古代出雲歴史博物館	2022	島根県立古代出雲歴史博物館 企画展 出雲と吉備
島根県立古代出雲歴史博物館	2022	Be-Archaeo物語 —科学と伝統のはざま—
昭和館	2022	昭和館館報 第23号 (令和3年度)
昭和館	2022	昭和のくらし研究 第20号
昭和館	2023	昭和館特別企画展図録『時代をまとう女性たち』
昭和女子大学光葉博物館	2022	昭和女子大学光葉博物館コレクション 日本の郷土玩具Ⅳ —車偶庵コレクション—
昭和女子大学光葉博物館	2022	沖縄の民具・工芸にふるさとを想う —川平朝清の沖縄—
女子美術大学	2022	女子美術大学広報誌 JOSHIBI No.195
女子美術大学美術館	2022	NIKE PRESS VOL.17
女子美術大学美術館	2023	2020-2021 年度 女子美術大学美術館年報 (第19号)
シルク博物館	2021	シルク博物館所蔵品展 描かれた養蚕 —蚕織錦絵の世界—
シルク博物館	2021	第26回 全国染織作品展
杉並区立郷土博物館分館	2022	発掘された縄文時代 —光明院南遺跡— 割れた石棒のなぞにせまる
住友不動産株式会社・国際文化財株式会社	2022	港区内近世都市江戸関連遺跡発掘調査報告 95[TM204] 俊朝寺寺域遺跡発掘調査報告書
成城大学民俗学研究所	2022	民俗学研究所紀要 第46集
成城大学民俗学研究所	2022	民俗学研究所紀要 第46集 別冊 柳田國男 旅先からの絵はがき (明治三十九～四十二年)

寄 贈・発 行 者	発行年	書 名 (巻・号)
成城大学民俗学研究所	2022	民俗学研究所ニュース No.136
成城大学民俗学研究所	2022	民俗学研究所ニュース No.137
成城大学民俗学研究所	2022	民俗学研究所ニュース No.138
成城大学民俗学研究所	2023	民俗学研究所ニュース No.139
世界遺産座喜味城跡ユンタンザミュージアム	2022	世界遺産座喜味城跡ユンタンザミュージアム 令和2年度 年報
仙台市教育委員会	2022	調査報告書第40集 足元からみる民俗 (30) —失われた伝承・変容する伝承・新たなる伝承—
仙台市教育委員会	2022	仙台市歴史民俗資料館資料集第20冊 写真資料(6)『征台軍凱旋記念帖』 従軍写真師のみた日清戦争・台湾での戦い
仙台市歴史民俗資料館	2022	仙台市歴史民俗資料館 年報2022
仙台市歴史民俗資料館	2022	仙台市歴史民俗資料館特別展 仙台の夏のくらし・秋のくらし
大正大学教務課学芸員課程	2022	けやき 大正大学学芸員課程年報 第26号 (令和3年度)
高山陣屋管理事務所	2022	令和3年度 高山陣屋企画展「幕領飛騨のおもてなし —代官・郡代が！巡見使が！！やって来る！！—」
たばこと塩の博物館	2022	丸山コレクション 西アジア遊牧民の染織 塩袋と伝統のギャッベ展
たばこと塩の博物館	2022	2021年度版 たばこと塩の博物館 年報 (37号)
たばこと塩の博物館	2022	パッケージで時間旅行 記念・観光たばこの世界
たばこと塩の博物館	2022	ヴィンテージライターの世界 炎と魅せるメタルワーク
玉川大学教育博物館	2022	玉川大学教育博物館 館報 第20号 2021年度
玉川大学教育博物館	2022	玉川大学教育博物館 紀要 第19号
玉川大学教育博物館	2022	博物館ニュース SHÛ No.58
玉川大学教育博物館	2022	博物館ニュース SHÛ No.59
たましん地域文化財団	2022	多摩のあゆみ 第186号
たましん地域文化財団	2022	多摩のあゆみ 第187号
たましん地域文化財団	2022	多摩のあゆみ 第188号
たましん地域文化財団	2023	多摩のあゆみ 第189号
多摩信用金庫・たましん美術館	2020	たましん美術館所蔵品目録
筑紫女学園大学文学部博物館学芸員課程	2022	博物館実習体験記『学芸員の星たち』
千葉県立関宿博物館	2022	令和4年度企画展図録 関東 塩ものがたり
調布市郷土博物館	2021	調布の文化財 第62号
調布市郷土博物館	2021	調布の文化財 第63号
調布市郷土博物館	2022	郷土博物館だより No.83
通信文化協会博物館部	2022	令和3年度郵政博物館 年報
筑波大学人文社会ビジネス科学学術院 人文社会科学研究群人文学学位プログラム 歴史・人類学サブプログラム	2022	筑波大学 先史学・考古学研究 第33号
土浦市立博物館	2021	土浦市立博物館年報 第34号
土浦市立博物館	2022	土浦市立博物館紀要 第32号
土浦市立博物館	2022	土浦市史資料集 長島尉信来翰集
帝京大学総合博物館	2021	帝京大学総合博物館企画展 帝京大学創基90周年記念 —帝京ことはじめ— SINCE1931 帝京商業学校の物語
帝京大学総合博物館	2022	帝京大学総合博物館 館報 第4号 2019・2020 (令和元・2) 年度
帝京大学総合博物館	2022	帝京大学総合博物館企画展 帝京大学大学院公衆衛生学研究科創設 10周年記念 ザ・公衆衛生！—社会と個人の健康を守る黒衣たち—
天空舎	2006	近代のいんばん手 —その意匠と時代背景—
天理大学出版部	2022	天理参考館報 第35号

寄 贈・発 行 者	発行年	書 名 (巻・号)
東京家政大学博物館	2022	東京家政大学博物館年報 令和3年度
東京工芸大学芸術学部	2022	東京工芸大学写大ギャラリー年報 Annual Report 2021
東京国立博物館	2022	東京国立博物館ニュース 第770号
東京国立博物館	2022	東京国立博物館ニュース 第771号
東京国立博物館	2023	東京国立博物館ニュース 第772号
東京国立博物館	2022	MUSEUM 東京国立博物館研究誌 第699号
東京国立博物館	2022	MUSEUM 東京国立博物館研究誌 第700号
東京国立博物館	2022	MUSEUM 東京国立博物館研究誌 第701号
東京国立博物館	2023	MUSEUM 東京国立博物館研究誌 第702号
東京大学大学院人文社会系研究科・文学部美術史研究室	2022	東京大学大学院人文社会系研究科・文学部美術史研究室研究紀要美術史論叢 38
東京都江戸東京博物館	2023	東京都江戸東京博物館紀要 第13号
東京都教育庁地域教育支援部管理課	2022	文化財の保護 第55号
東京都三多摩公立博物館協議会2021年度会長 羽村市郷土博物館	2022	東京都三多摩公立博物館協議会会報 ミュージアム多摩 No.43
東京都埋蔵文化財センター	2021	たまのよこやま 127
東京都埋蔵文化財センター	2022	たまのよこやま 128
東京都埋蔵文化財センター	2022	たまのよこやま 129
東京都埋蔵文化財センター	2022	たまのよこやま 130
東京都埋蔵文化財センター	2022	東京都埋蔵文化財センター 年報42
東京都埋蔵文化財センター	2022	令和4年度企画展示『境・道・恵—多摩丘陵の3つの顔—』解説冊子
東京都埋蔵文化財センター	2022	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第372集 北区十条台遺跡群南橋遺跡—都営中十条アパート及び都営王子・王子母子アパート撤去等事業に伴う埋蔵文化財発掘調査— 第1分冊
東京都埋蔵文化財センター	2023	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第373集 北区十条台遺跡群Ⅲ—十条地区沿道一体整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—
東京都埋蔵文化財センター	2023	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第375集 北区栄町貝塚—北区栄町付近石神井川流域貯留池工事に伴う埋蔵文化財調査—
東京都埋蔵文化財センター	2023	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第376集 練馬区比丘尼橋遺跡C地点T区—外郭環状線の2街路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—
東北歴史博物館	2022	東北歴史博物館令和3年度年報
東北歴史博物館	2022	東北歴史博物館研究紀要 23
徳島県埋蔵文化財センター	2022	徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol.33—令和3(2021)年度—
徳島県立近代美術館	2022	徳島県立近代美術館研究紀要 第22号
徳島県立近代美術館	2022	風土と美術—青森／徳島
徳島県立近代美術館	2022	特別展「カミのかたち」解説冊子
徳島県立近代美術館	2023	絵の中に人生が見つかる—なぜ私たちの社会にユニバーサル美術館は必要なのか
豊島区	2021	企画展図録 薬と祈りの処方箋
豊島区	2021	鈴木信太郎記念館だより 第5号
豊島区	2022	鈴木信太郎記念館だより 第6号
豊島区	2022	区制90周年特別展解説パンフレット 豊島大博覧会 ～過去から学び、今日を生き、未来に希望～
豊島区	2022	豊島区立郷土資料館研究紀要 生活と文化 第31号
豊島区	2023	豊島区立郷土資料館研究紀要 生活と文化 第32号
豊島区立郷土資料館	2021	かたりべ No.140
豊島区立郷土資料館	2022	かたりべ No.141
豊島区立郷土資料館	2022	かたりべ No.142

寄 贈・発 行 者	発行年	書 名 (巻・号)
豊島区立郷土資料館	2023	かたりべ No.143
豊島区立郷土資料館	2023	かたりべ No.144
豊島区立郷土資料館	2023	かたりべ No.145
豊島区立鈴木信太郎記念館	2022	鈴木信太郎記念館だより 第7号
豊島区立鈴木信太郎記念館	2023	鈴木信太郎記念館だより 第8号
豊島区立雑司が谷旧宣教師館	2021	雑司が谷旧宣教師館だより 第68号
豊島区立雑司が谷旧宣教師館	2022	雑司が谷旧宣教師館だより 第69号
豊島区立雑司が谷旧宣教師館	2023	雑司が谷旧宣教師館だより 第70号
虎ノ門・六本木地区市街地再開発組合	2015	港区内近世都市江戸関連遺跡発掘調査報告 59[TM162] 但馬出石藩 仙石家屋敷跡遺跡発掘調査報告書 ―本文編―
取手市埋蔵文化財センター	2022	取手市埋蔵文化財センター第50回記念企画展 目で見てふりかえる取手
奈良県立民俗博物館	2022	奈良県立民俗博物館だより Vol.47 No.1
奈良国立博物館	2022	奈良国立博物館だより 第121号
奈良国立博物館	2022	奈良国立博物館だより 第122号
奈良国立博物館	2022	奈良国立博物館だより 第123号
奈良国立博物館	2023	奈良国立博物館だより 第124号
奈良民俗写真の会	2022	2021（令和3）年度 第10回写真展 私がとらえた大和の民俗
南山大学人類学博物館	2022	南山大学人類学博物館紀要 第41号
新潟県立歴史博物館	2022	令和4年度秋季企画展 生業絵巻尽 ―ひらけ！江戸の産業図鑑―
新潟県立歴史博物館	2023	新潟県立歴史博物館研究紀要 第24号
新島村教育委員会・新島村博物館	2022	2020年度 新島村博物館年報
日常と文化研究会	2022	日常と文化 10
日本芸術文化振興会日本博事務局	2022	独立行政法人 日本芸術文化振興会 委託事業 令和3年度「日本博」開催に係る効果検証 報告書
日本考古学協会	2022	日本考古学年報74（2021年度版）
日本考古学協会	2022	日本考古学 第54号
日本考古学協会	2022	日本考古学 第55号
日本博物館協会	2022	令和4年度 会員名簿
日本博物館協会	2022	博物館研究 Vol.57 No.4
日本博物館協会	2022	博物館研究 Vol.57 No.5
日本博物館協会	2022	博物館研究 Vol.57 No.6
日本博物館協会	2022	博物館研究 Vol.57 No.7
日本博物館協会	2022	博物館研究 Vol.57 No.8
日本博物館協会	2022	博物館研究 Vol.57 No.9
日本博物館協会	2022	博物館研究 Vol.57 No.10
日本博物館協会	2022	博物館研究 Vol.57 No.11
日本博物館協会	2022	博物館研究 Vol.57 No.12
日本博物館協会	2023	博物館研究 Vol.58 No.1
日本博物館協会	2023	博物館研究 Vol.58 No.2
日本博物館協会	2023	博物館研究 Vol.58 No.3
日本文化財保護協会	2022	公益財団法人日本文化財保護協会 『紀要』第6号 2022.8
日本ミュージアム・マネジメント学会	2022	日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要 第26号
日本ミュージアム・マネジメント学会	2022	日本ミュージアム・マネジメント学会 会報 No.88
練馬区立石神井公園ふるさと文化館	2022	石神井公園ふるさと文化館ニュース Vol.44
練馬区立石神井公園ふるさと文化館	2022	石神井公園ふるさと文化館ニュース Vol.45

寄 贈・発 行 者	発行年	書 名 (巻・号)
野田市郷土博物館・市民会館	2023	野田市郷土博物館 市民会館 年報・紀要 第15号 2021年度
箱根町立郷土資料館	2022	企画展 箱根を拓く ―洪沢栄一と箱根―
浜松市博物館	2019	浜松市博物館報 第31号
浜松市博物館	2022	浜松市博物館報 第34号
日立市郷土博物館	2021	市民と博物館 第139号
日立市郷土博物館	2021	市民と博物館 第140号
日立市郷土博物館	2021	市民と博物館 第141号
日立市郷土博物館	2022	市民と博物館 第142号
平塚市博物館	2022	平塚市博物館年報 第45号
平塚市博物館	2022	平塚市博物館研究報告 自然と文化 第45号
平塚市博物館	2023	第22回博物館文化祭―ワーキンググループ活動報告・発表・実演―リーフレット
藤沢市教育委員会	2022	藤沢市埋蔵文化財調査報告 第9集 神奈川県藤沢市西富西原遺跡 第3・4・6次調査発掘調査報告書
藤沢市教育委員会	2022	南鍛冶山遺跡発掘調査報告書 藤沢都市計画事業北部第二(二地区)土地区画整理事業に伴う調査 第17巻 道状遺構・溝状遺構
府中市文化スポーツ部文化生涯学習課 ふちゅう生涯学習センター共同事業体	2022	府中市生涯学習センター 生涯楽習だより 第79号
府中市文化スポーツ部文化生涯学習課 ふちゅう生涯学習センター共同事業体	2022	府中市生涯学習センター 生涯楽習だより 第80号
府中市文化スポーツ部文化生涯学習課 ふちゅう生涯学習センター共同事業体	2022	府中市生涯学習センター 生涯楽習だより 第81号
府中市文化スポーツ部文化生涯学習課 ふちゅう生涯学習センター共同事業体	2023	府中市生涯学習センター 生涯楽習だより 第82号
船橋市郷土資料館	2022	令和3年度 船橋市郷土資料館年報
船橋市郷土資料館・飛ノ台史跡公園博物館	2022	船橋市郷土資料館・飛ノ台史跡公園博物館館報 みゅーじあむ・船橋 vol.18
船橋市郷土資料館・飛ノ台史跡公園博物館	2022	船橋市郷土資料館・飛ノ台史跡公園博物館館報 みゅーじあむ・船橋 vol.19
文京ふるさと歴史館	2022	文京ふるさと歴史館だより 第29号
文京ふるさと歴史館友の会事務局	2022	文京ふるさと歴史館「友の会だより」増刊号 X X X 花時計
法政大学資格課程	2022	法政大学資格課程年報 Vol.11 2021年度
法政大学文学部	2022	法政大学文学部紀要 第84号 令和3年度
法政大学文学部	2022	法政大学文学部紀要 第85号
HOSEIミュージアム	2023	HOSEIミュージアム紀要 第3号・法政大学史資料集 第41集
北海道立北方民族博物館	2021	北海道立北方民族博物館資料目録 17 宮岡文庫～環北太平洋の言語～目録
北海道立北方民族博物館	2022	令和3年度年報
北海道立北方民族博物館	2022	北方民族博物館だより No.124
北海道立北方民族博物館	2022	北方民族博物館だより No.125
北海道立北方民族博物館	2022	北方民族博物館だより No.126
北海道立北方民族博物館	2022	北方民族博物館だより No.127
北海道立北方民族博物館	2022	北海道立北方民族博物館第37回特別展図録 イヌイトの壁掛けと先住民アート
毎日新聞社・NHK・NHKプロモーション	2022	東京国立博物館創立150周年記念 特別展 国宝 東京国立博物館のすべて
町田市教育委員会	2022	民権ボックス34号 石阪正孝の生涯
町田市教育委員会	2022	自由民権 35号
町田市立博物館	2022	2020年度 町田市立博物館 年報／紀要

寄 贈・発 行 者	発行年	書 名 (巻・号)
町田市立博物館	2023	2021年度 町田市立博物館 年報／紀要
町田市立博物館	2022	町田の酒×酒器 ―町田市立博物館所蔵品より―
松戸市立博物館友の会事務局	2023	松戸市立博物館友の会会報 第131号 付録：近隣博物館情報・活動情報一覧
「守れ！文化財～モノとヒトに光を灯す～」事業実行委員会	2022	令和3年度文化庁文化芸術振興費補助金 地域と共働した博物館創造活動支援事業 守れ！文化財 ～モノとヒトに光を灯す～ 2021年度報告書
「明治日本の産業革命遺産」福岡県世界遺産連絡会議	2022	官営八幡製鐵所開業120年 鉄の都のものがたり ―釜石と八幡― 展示解説パンフレット
三重県総合博物館	2022	みえんしす 37号
三重県総合博物館	2022	みえんしす 38号
三重県総合博物館	2022	みえんしす 39号
三重県総合博物館	2023	みえんしす 40号
三井不動産レジデンシャル株式会社	2022	港区内近世都市江戸関連遺跡発掘調査報告92[TM214] 筑後久留米藩有馬家屋敷跡遺跡発掘調査報告書 ―（仮称）港区三田一丁目計画に伴う埋蔵文化財発掘調査―
港区教育委員会	2021	港区文化財調査年報1 ―令和元年度の調査―
港区教育委員会	2022	令和3年度港区指定文化財
港区立郷土歴史館	2022	港区立郷土歴史館 館報 -2- 令和2（2020）年度
港区立郷土歴史館	2022	歴史館だより 第11号
港区立郷土歴史館	2022	歴史館ニュース 第11号
明治大学博物館	2022	明治大学博物館 2022年度特別展 新しいお殿様 ―所替・その後―
明治大学博物館・南山大学人類学博物館	2022	明治大学博物館＋南山大学人類学博物館 合同シンポジウム報告書2019-2020
森ビル株式会社	2021	港区内近世都市江戸関連遺跡発掘調査報告69[TM170] 港区No.170遺跡発掘調査報告書
安田不動産株式会社	2022	港区内近世都市江戸関連遺跡発掘調査報告94[TM181-4] 愛宕下武家屋敷群 一陸奥一 関藩田村家屋敷跡遺跡発掘調査報告書Ⅱ
八千代市立郷土博物館	2022	八千代市立郷土博物館 館報 No.28（令和3年度）
有限会社 吾妻考古学研究所	2022	神奈川県藤沢市 稲荷台地遺跡群 第38次調査 発掘調査報告書
横浜市ふるさと歴史財団	2022	横浜ユーラシア文化館紀要 第10号
横浜市ふるさと歴史財団	2022	横浜ユーラシア文化館ニュース No.37
横浜市ふるさと歴史財団	2022	横浜ユーラシア文化館ニュース No.38
横浜市ふるさと歴史財団	2022	横浜中華街160年の軌跡―この街が、ふるさとだから。
横浜市歴史博物館	2022	横浜市歴史博物館ニュース No.53
読売新聞社・NHK・NHK プロモーション	2023	特別展 東福寺
立教学院展示館	2022	大学認可100周年記念展 立教大学の誕生
立正大学博物館	2022	立正大学博物館年報20（令和3<2021>年度）
立命館大学国際平和ミュージアム	2022	立命館大学国際平和ミュージアムだより 第30巻第1号
立命館大学国際平和ミュージアム	2022	立命館大学国際平和ミュージアムだより 第30巻第2号
六本木五丁目西地区市街地再開発組合・株式会社パスコ	2022	港区内近世都市江戸関連遺跡発掘調査報告91[TM166] 相模小田原藩大久保家屋敷跡遺跡発掘調査報告書 第1分冊
六本木五丁目西地区市街地再開発組合・株式会社パスコ	2022	港区内近世都市江戸関連遺跡発掘調査報告91[TM166] 相模小田原藩大久保家屋敷跡遺跡発掘調査報告書 第2分冊
和歌山県立博物館	2022	和歌山県立博物館研究紀要 第28号
和歌山県立博物館	2022	博物館だより 第27号
和歌山県立博物館	2022	特別展 濱口梧陵と廣八幡宮 ―法蔵寺・養源寺・安楽寺の文化財とともに―

寄 贈・発 行 者	発行年	書 名 (巻・号)
和歌山県立博物館	2022	特別展 きのかにの大般若経 ―わざわいはらう経典―
和歌山市	2022	特別展 表千家とわかやま ―紀州藩における交流―
早稲田大学會津八一記念博物館	2022	早稲田大学會津八一記念博物館 研究紀要 第23号
早稲田大学會津八一記念博物館	2022	下総龍角寺

令和4年度第13回企画展 「“つくる”を育む～令和と昭和の学生たち～」

川本 利恵*

はじめに

令和4(2022)年5月30日(月)から7月29日(金)の期間、企画展「“つくる”を育む～令和と昭和の学生たち～」を開催した。

昨年度に引き続き今回も、8月までに開催されるオープンキャンパスのために、前回開催した「学生成果展」から引きついだ作品とともに、収蔵資料の中からテーマを決めて選定し、まとめることにした。

1. タイトルの決定

例年、5月から8月にかけての企画は収蔵資料を中心に構成しているが、上記のようにオープンキャンパスで来校する高校生にも見てもらえるよう、「学生成果展」の中から延長してもよいとの了解を得た作品を引き続き展示することに決まった。現代生活学部生活デザイン学科からは建築模型、バレエやオペラの衣装、染色、刺繍や織物の手芸作品などを、児童学科からはオンライン授業での作品画像を、人間栄養学部人間栄養学科からは企業連携の食品開発やエコバッグ製作の報告、実習授業の活動報告書と発表用のパワーポイント原稿であった。それ以外で展示ケース1台から2台分にまとまる程度の資料と点数を選定することにした。

東京家政学院が来年創立100周年を迎えるに当たって、関連する内容を考えたとき教育の特徴の一つとして創立者大江スミ先生の意向で創立当初から実習・演習の充実を図ってきたことが思い浮かんだ。それは、専門学校、短期大学、大学へと受け継がれ今に至っている。学生たちは、モノづくりや企画構想・実践力を身に付けるといった“つくる”力を育んできた。そこで令和時代の学生たちの作品とともに昭和時代の学生たちの作品も紹介することとし、タイトルを「“つくる”を育む～令和と昭和の学生たち～」とした。

2. 展示構成

学生の作品以外では、旧短期大学の卒業生から寄贈された作品から選ぶことにした。戦前の専門学校の卒業生からは洋裁の作品であった制帽を、昭和30～40年代の短期大学の卒業生からは洋裁の課題作品であった乳児ドレス類、手芸の課題作品であった乳児用帽子、靴下、レースや刺繍のテーブルセンターなどを選んだ。

3. 印刷物

A4判ポスター(写真1)を作成し、その裏面に資料リストを印刷した。

ポスターは大判コピー機でA1判大に印刷し、入口の扉やボードに貼り、A4・A3判で印刷したものを校内の掲示板に貼って学内者へ向けての広報とした。



写真1 ポスター

4. 展示作業

当館には、全体がガラス張りの「大ケース」と、大ケースの高さ半分あたりから上部がガラス張りの「中

*川本 利恵(かわもと りえ) 令和4年度生活文化博物館学芸員

ケース」、上からのぞき見る高さの「のぞきケース」、中ケースの幅半分の大きさの「柱ケース」と称する通常4種類の展示ケースがあり、それぞれに資料を振り分けていった。

入口を入って窓側に向かう壁際の中ケース2台に建築模型（写真2）をそれぞれ1点ずつ入れ、窓側に沿って中ケース1台にはもう1点の建築模型を入れた。柱を挟んで中ケースにバレエ衣装（写真3）とアクセサリを、大ケースにはオペラ衣装（写真4）を入れた。次に中ケースを並べ、そのケースには金網を取り付け、「図画工作科教育」の報告書パネル（写真5）を掛けた。そこから直角に中ケース2台を並べ、先のケースには絞り染のストールや板締め染の和紙、摺込み染のポストカード、電子レンジ染のエコバッグなどの染物作品を入れ、次のケースには簡易的な卓上機を使った織物のランチョンマット（写真6）を入れた。またそこから直角に配した柱ケースには、戦前に制作された制帽と昭和30年代前半の幼児用の帽子とレースのテーブルセンターを入れ、続く中ケース3台にそれぞれ乳児用のドレス（写真7）を、刺繍を施した女児用のドレ

スとテーブルセンター（写真8）を、レース編みのテーブルセンターを入れた。最後に柱ケースを置き、大人用のブラウスと毛糸編みの靴下を入れた。その向かいの壁面には、本学創立期の写真パネルを貼った。

次に展示室中央にのぞきケース2台を背中合わせに



写真4 オペラ衣装



写真2 建築模型

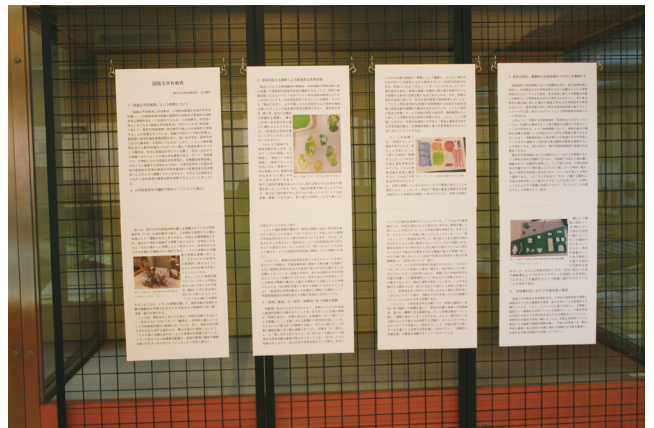


写真5 「図画工作科教育」報告パネル



写真3 バレエ衣装



写真6 ランチョンマット



写真7 乳児用のドレス



写真10 食品開発の報告とエコバッグ



写真8 女児用のドレスとテーブルセンター

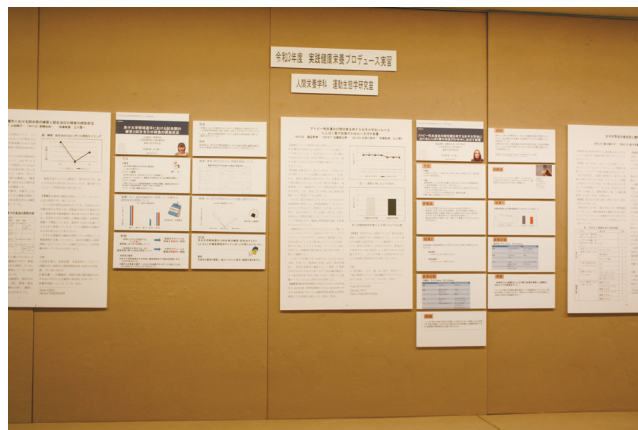


写真11 「実践健康栄養プロデュース実習」報告パネル



写真9 刺繍ボックスや壁飾り

して島を2つつくり、一つ目の島にはそれぞれランチョンマットと巾着袋やマフラーなどを入れ、もう一つの島にはそれぞれ刺繍を施したボックスや壁飾りなど(写真9)と食品開発の報告やエコバッグ(写真10)を入れた。その向かいの壁面には、令和3年度実践健康栄養プロデュース実習の報告パネル(写真11)を貼った。

おわりに

今回は、東京家政学院創立100周年を見据えて、学院史に関係する内容を考えた企画となった。来年度の特別展も学院史に関する展示なので、この展覧会が呼び水となることを期待した。

今年度も新型コロナウイルス感染症の影響が続いていたが、見学に際しては予約なしとし、マスクの着用、手指の消毒については引き続き促すことにした。

感染者が少なくなり、見学者対応も緩和されてきたが、やはり出控えされる方が多いのか見学者は少なかった。

展示資料一覧

番号	タイトル	年代	作者	番号	タイトル	年代	作者
1	Nénuphar クロード・モネの水上美術館	令和4年 (2022)	生活デザイン学科 4年 中村莉子	31	令和3年度 実践健康栄養ブ ロデュース実習 高校女子ソ フトボールチームにおける栄 養教育が試合期の食生活に及 ぼす効果	令和3年 (2021)	人間栄養学科4年 横田絵里香 葛祐香、森池あおい
2	トリノモ 新と旧が混在 する上野で 鳥と戯れる複合施設	令和4年 (2022)	生活デザイン学科 4年 伊野文乃	32	令和3年度 実践健康栄養ブ ロデュース実習 男子大学野 球選手における試合期の練習 と試合当日の補食の摂取状況	令和3年 (2021)	人間栄養学科4年 上田瑚子 高橋和枝
3	Lien ～集い、繋がり、共 存できる 宿泊体験施設～	令和4年 (2022)	生活デザイン学科 4年 澤柳美海	33	令和3年度 実践健康栄養ブ ロデュース実習 アトピー性 皮膚炎の既往歴を有する女子 大学生におけるたんばく質付 加食がかゆみに及ぼす影響	令和3年 (2021)	人間栄養学科4年 渡辺夢季、佐藤美友希 中津川真由"
4	バレエ「くるみ割り人形」第 2幕 金平糖の精の衣装・頭飾り	令和3年 (2021)	生活デザイン学科 1年 山本美久	34	令和3年度 実践健康栄養ブ ロデュース実習 女子大学生 の食生活と健康状態の関連性	令和3年 (2021)	人間栄養学科4年 笹川菜々子、佐々木星奈
5	オペラ「カルメン」第1幕 カルメンの衣装	令和2年 (2020)	生活デザイン学科 卒業生 飯田真琴	35	制帽	昭和18年 (1943)	家18回 加藤富子
6	オペラ「カルメン」第1幕 カルメンの頭飾り	令和2年 (2020)	生活デザイン学科 留学生 牛進	36	幼児用帽子	昭和32年 (1957)	短別5・短7回 福田正子
7	図画工作科教育	令和4年 (2022)	児童学科1年次 受講生一同	37	『毛糸編み』	昭和36年 (1961)	東京家政学院短期大学 手芸研究室
8	ストール	令和4年 (2022)	生活デザイン学科 2年 金岡杏紗湖	38	テーブルセンター	昭和32年 (1957)	短別5・短7回 福田正子
9	ストール	令和4年 (2022)	生活デザイン学科 2年 中道静空	39	乳児コート	昭和37年 (1962)	短12回 市川雅子
10	ストール	令和4年 (2022)	生活デザイン学科 2年 澤田紫月海	40	乳児よだれかけ	昭和37年 (1962)	短12回 市川雅子
11	ストール	令和4年 (2022)	生活デザイン学科 2年 田嶋結月	41	乳児シャツ	昭和37年 (1962)	短12回 市川雅子
12	ストール	令和4年 (2022)	生活デザイン学科 2年 江成香音	42	乳児スリッパ	昭和37年 (1962)	短12回 市川雅子
13	ストール	令和4年 (2022)	生活デザイン学科 2年 天利優花	43	乳児ドレス	昭和37年 (1962)	短12回 市川雅子
14	生活デザイン演習C作品（ハ ンカチ、テーブルセンター、 和紙染）	令和4年 (2022)	生活デザイン学科 2年 金岡杏紗湖	44	乳児ドレス	昭和37年 (1962)	短12回 市川雅子
15	生活デザイン演習C作品（エ コバック、ハガキ、ハンカチ、 テーブルセンター、和紙染）	令和4年 (2022)	生活デザイン学科 2年 中道静空	45	乳児コート	昭和40-42年 (1965-67)	短16回 市川貞子
16	ランチョンマット、基礎織（平 織、斜文織）	令和4年 (2022)	生活デザイン学科 2年 田嶋結月	46	「スカート・女兒ドレスの仕 立方」	昭和36年 (1961)	東京家政学院短期大学 洋裁研究室
17	ランチョンマット、基礎織（平 織、斜文織）	令和4年 (2022)	生活デザイン学科 2年 江成香音	47	「クロッシェ・レース ドロン・ワーク カット・ワー ク」	昭和36年 (1961)	東京家政学院短期大学 手芸研究室
18	ランチョンマット、基礎織（平 織、斜文織）	令和4年 (2022)	生活デザイン学科 2年 小松花帆	48	女兒ワンピース	昭和37年 (1962)	短12回 市川雅子
19	ランチョンマット、基礎織（平 織、斜文織）	令和4年 (2022)	生活デザイン学科 2年 森島妃南	49	エプロン	昭和40-42年 (1965-67)	短16回 市川貞子
20	ランチョンマット、基礎織（平 織、斜文織）	令和4年 (2022)	生活デザイン学科 2年 中道静空	50	テーブルセンター	昭和41年 (1966)	短16回 市川貞子
21	ランチョンマット、基礎織（平 織、斜文織）	令和4年 (2022)	生活デザイン学科 2年 澤田紫月海	51	テーブルセンター	昭和40-42年 (1965-67)	短16回 市川貞子
22	ハンドクラフト演習B作品（カ ルトナージュ・ボックス、フ ランス刺繍の巾着袋、リボン 刺繍の小さな壁飾り、イニ シャルのペンダント・ヘッド、 ユニコーンのクロスステッ チ）	令和4年 (2022)	生活デザイン学科 4年 中村友梨香	52	テーブルクロス	昭和41年 (1966)	短16回 市川貞子
23	ハンドクラフト演習B作品（カ ルトナージュ・ボックス、フ ランス刺繍の巾着袋、リボン 刺繍の小さな壁飾り、イニ シャルのペンダント・ヘッド、 ユニコーンのクロスステッ チ）	令和4年 (2022)	生活デザイン学科 4年 田村瑛里香	53	テーブルセンター	昭和37年 (1962)	短12回 市川雅子
24	ウィービングデザイン演習B 作品（変化組織サンプル （マット、ポーチ）、巾着袋）	令和4年 (2022)	生活デザイン学科 3年 小川夏生	54	テーブルセンター	昭和41年 (1966)	短16回 市川貞子
25	マフラー	令和4年 (2022)	生活デザイン学科 3年 小川夏生	55	テーブルセンター	昭和41年 (1966)	短16回 市川貞子
26	マフラー	令和4年 (2022)	生活デザイン学科 3年 六笠南海	56	クッションカバー	昭和41年 (1966)	短16回 市川貞子
27	テーブルランナー	令和4年 (2022)	生活デザイン学科 3年 平川琴梨	57	テーブルセンター	昭和41年 (1966)	短16回 市川貞子
28	巾着袋	令和4年 (2022)	生活デザイン学科 3年 高橋輝羽	58	テーブルセンター	昭和41年 (1966)	短16回 市川貞子
29	ランチョンマット	令和4年 (2022)	生活デザイン学科 3年 岩野小町	59	テーブルセンター	昭和41年 (1966)	短16回 市川貞子
30	千代田区における和食文化・ 芸術の体験プログラム開発に 関する研究活動報告・エコ バック	令和3年 (2021)	人間栄養学科	60	ブラウス	昭和40-42年 (1965-67)	短16回 市川貞子
				61	靴下	"昭和40-42 年 (1965-67) "	短16回 市川貞子

令和4年度第14回企画展 「完成までの道のり～資料の製作工程～」

川本 利恵*

はじめに

令和4(2022)年9月20日(火)から10月21日(金)の期間、企画展「完成までの道のり～資料の製作工程～」を開催した。

例年この時期の企画では、収蔵資料の中からこれまであまり展示してこなかった資料を紹介することにしており、今回は主に伝統工芸品などの資料を購入する際に依頼している製作工程をピックアップすることにした。なお、同期間には学芸員資格課程「博物館実習」における展示実習展も同時開催した。

1. タイトルの決定

生活に必要な食品、日用品、衣服、家具などは、すべて製作の手順を踏んで完成品となる。当館では伝統的な工芸品などの資料を購入する際には、できるだけ製作工程を依頼している。職人の技術力の高さも必要だが、長年の継承によって完成までの工程も最善の方法が磨き上げられてきたと考えるからである。このことを踏まえてタイトルは「完成までの道のり～資料の製作工程～」とした。

2. 展示構成

筆者自身が携わった過去の展覧会で時折展示してきた製作工程の下駄、三春張り子人形、各地(伏見、中野、小幡、長浜、三次)の土人形、越後上布の麻糸、大山コマ、こけし、クンストレース絵をまず搬出し、平成16(2004)年第16回特別展で展示した人形(尾山・市松・木目込み)、平成25(2013)年第25回特別展で展示した食品サンプルの料理標本(源氏卵・墨染豆腐・長崎島田楽・ふのやき)を出し、資料カードを手掛かりに、椀、切子ガラス碗を探し出した。

椀と切子ガラスに関しては収納されていた箱の中に工程を説明したキャプションが入っていたため、それらを参考にして新たなキャプションを作成した。

3. 印刷物

A4判ポスター(写真1)を作成し、その裏面に資料リストを印刷した。

ポスターは大判コピー機でA1判大に印刷し、入口の扉やボードに貼り、A4・A3判で印刷したものを校内の掲示板に貼って学内者へ向けての広報とした。



写真1 ポスター

4. 展示作業

当館には、全体がガラス張りの「大ケース」と、大ケースの高さ半分あたりから上部がガラス張りの「中ケース」、上からのぞき見る高さの「のぞきケース」、中ケースの幅半分の大サイズの「柱ケース」と称する通常4種類の展示ケースがあり、それぞれに資料を振り分けていった。

入口を入って窓側に向かう壁際の中ケース2台に下駄と三春張り子人形(写真2)の工程をそれぞれ入れ、窓側に沿って中ケースを4台並べて、伏見・中野(写

*川本 利恵(かわもと りえ) 令和4年度生活文化博物館学芸員

真3)、小幡、長浜、三次土人形の工程を入れた。そこから直角に中ケース2台を並べ、先のケースには料理標本の源氏卵・墨染豆腐・長崎烏田楽・ふのやきの製作工程(写真4)を入れ、次のケースには越後上布の麻糸の製作工程(写真5)を入れた。またそこから直角に大ケース3台に、それぞれ尾山人形(写真6)、市松人形、木目込み人形の製作工程を入れた。

次に展示室中央にのぞきケース2台を背中合わせにして島を2つつくり、一つ目の島にはそれぞれ切子ガラス碗(写真7)と椀(写真8)の製作工程を入れ、もう一つの島には鳴子こけし(写真9)の製作工程と大山コマの製作工程とともに同様の技術を用いて製作された木地玩具(写真10)を参考資料として入れた。その向かいの壁面には、クンストレース編みで絵を描いたクンストレース絵(写真11)とその編目の設計図と編目模様図を3点ずつ貼った。



写真4 源氏卵・墨染豆腐・長崎烏田楽・ふのやきの製作工程



写真5 越後上布の麻糸の製作工程



写真2 三春張り子人形の製作工程



写真3 伏見・中野土人形の製作工程



写真6 尾山人形の製作工程



写真7 切子ガラス碗の製作工程



写真10 大山コマの製作工程と木地玩具



写真8 碗の製作工程



写真11 クンスト雷斯絵と編目模様図



写真9 鳴子こけしの製作工程

おわりに

今回紹介した作品は、作業用の道具として機械を使うものもあるが、いずれも職人の手や目の熟練度が問われるものであり、それとともに職人それぞれの持つ個性も表現されている。わが国の“ものづくり”技術の賜物である。

前回の企画展と同様に見学に際しては予約なしとし、マスクの着用、手指の消毒についてのみ引き続き促すことにしたので、多くの方に見ていただきたかったがやはり出控えされる方が多いのか見学者は少ない印象であった。

展示資料一覧

企画展リスト

番号	タイトル	年代	作者及び生産地
1	下駄製作工程	平成6年（1994）	茨城県結城市
2	三春人形製作工程	平成16年（2004）	福島県郡山市
3	三春人形製作工程（一部）	平成24年（2012）	福島県郡山市
4	伏見人形製作工程	平成18年（2006）	京都府京都市
5	中野人形製作工程	平成26年（2014）	長野県中野市
6	小幡人形製作工程	平成18年（2006）	滋賀県東近江市
7	長浜人形製作工程	平成26年（2014）	島根県浜田市
8	三次人形製作工程	平成21年（2009）	広島県三次市
9	料理標本製作工程（源氏卵・墨染豆腐・長崎烏田楽・ふのやき）	平成25年（2013）	東京都
10	越後上布製作工程	平成7年（1995）	新潟県南魚沼郡塩沢町（現 南魚沼市）
11	尾山人形製作工程	平成16年（2004）	東京都
12	市松人形製作工程	平成16年（2004）	東京都 松乾斎東光作
13	木目込み人形製作工程	平成16年（2004）	東京都
14	大山コマ製作工程	平成13年（2001）	神奈川県伊勢原市
15	参考 ずんぐりごま	平成13年（2001）	宮城県白石市 新山民夫作
16	参考 ひよこ飛び出し	平成13年（2001）	宮城県白石市 新山民夫作
17	参考 ちょうちんごま	平成13年（2001）	宮城県白石市 新山民夫作
18	参考 投げこま 3寸	平成13年（2001）	宮城県刈田郡蔵王町 丑蔵庵作
19	参考 投げこま 4寸	平成13年（2001）	宮城県刈田郡蔵王町 丑蔵庵作
20	鳴子こけし製作工程	平成13年（2001）	宮城県 大沼秀雄作
21	椀製作工程	平成6年（1994）	埼玉県
22	切りガラス碗製作工程	平成4年（1992）	東京都
23	クンストレース絵「見返り美人」 （編目模様図付）	平成9年（1997）	石川なごみ作
24	クンストレース絵「笛を吹く乙女」 （編目模様図付）	平成8年（1996）	石川なごみ作
25	クンストレース絵「ぶどう祭り」 （編目模様図付）	平成3年（1991）	石川なごみ作

展示実習展リスト

26	江戸城から皇居へ ～門を巡る時代の変遷～	令和4年（2022）	現代家政学科A班：石鍋明日香、市川咲笑、 伊藤璃奈、南崎文絵
27	家政学と学び舎 ～大江スミ先生が目指した家政学～	令和4年（2022）	現代家政学科B班：佐野陽音、鈴木りん、 中居未沙貴、中澤優希

令和4年度第34回特別展 「祈りの形—上巳と端午の節句飾り—」

川本 利恵*

はじめに

令和4年度は、第34回特別展「祈りの形—上巳と端午の節句飾り—」を、令和4（2022）年10月25日（火）から令和5（2023）年2月3日（金）の期間、千代田三番町キャンパス（以下、「三番町」という。）1号館ロビーにおいてパネル展示として、11月7日（月）から令和5（2022）年2月3日（金）の期間、本展示として町田キャンパス（以下、「町田」という。）生活文化博物館にて開催した。

今回の企画のきっかけとなったのは、令和3（2021）年に寄贈された七段飾りの雛人形である。寄贈者は家の建替えで不要となる雛人形を捨てるに忍びないとのことで依頼された。当館では昭和時代の資料も収集していたので寄贈を受け入れ、この資料のお披露目をしたと考えたことから始まった。

1. テーマの決定

展覧会の内容については過去の特別展を参考にした。昨年度は開館当初からの特別展を振り返る企画だったので、ちょうどよい機会となった。

雛人形や武者人形を扱った展覧会は平成16（2004）年の特別展「日本人形の姿と形—節句飾りを絵解きする—」で、これは五節句や雛人形と武者人形の意味や飾り方、人形製作が主な内容であった。雛人形や武者人形を扱うに当たっては、会期との時期が合わないという問題があるが、当時は当館で平成16年の10月8日から11月14日の会期、他館は翌年の2月6日から5月8日の会期だったので巡回展という形式であれば、ぴったりと時期が合い懸念はなかった。しかし、今回は11月から2月にかけての会期であるため、以前は導入部分で簡潔にまとめられていた「五節句」を中心にすることにした。節句はもともと季節の変わり目で体調を崩しやすい時期に邪気を払い、老若男女ともに健康を願う行事であり、雛人形や武者人形を飾ることは

子どもの成長を祝い、健康を願うことであった。このことはここ数年のコロナ禍の状況にも合致するのではないかと考え、また、近年では節句の飾り自体も簡素化されたり、飾らないことも多くなっているので本来の意味を再認識してもらう機会としたかった。

この企画は令和3（2021）年12月16日（木）の運営委員会で議題に上げ、承認されたが、一人の委員から、節句料理などを加えて食へのアプローチを試みると開催時期と節句の時期との違和感がなくなるのではないかと意見が出されたので、本来の節句の儀礼や飾り、飲食を示すことにした。

また、特別展に関連したイベントとして製作キットを利用した雛人形や武者人形を手作りするワークショップを開催することにした。

2. 資料の選定

資料の選定に当たっては七段飾りの雛人形を中心に、当館所蔵の雛人形をすべて展示することにした。これまで各地の土人形（古形博多・津屋崎・のごみ・三次・長浜・北条・伏見・小幡・乙川・中野・中湯川・堤・八橋）を購入する際に定番の人形として雛人形を選んでいたので、点数はかなりあるはずだが、現在のものも取り入れたいと考えた。ここ十数年で雛人形は狭い住宅でも飾れるような小型化が進んでいる。高額で大型なものも存在するが、小型で値段も手ごろな価格のものがネット通販などで気軽に購入することができる状況であるため、新資料として小型で素材が布・木・陶器・ガラス製のものを選んで購入した。当館は武者人形や兜飾り・鯉のぼりを所蔵していないので、それらも小型のものを購入した。武者人形については、過去の特別展においても、中心となる武者人形は個人蔵のものと他館からの借用となったため、今回も個人蔵のものを借用することにした。当館所蔵のものとしては鍾馗図の幟と戦国時代の五大武将（織田信長、豊

*川本 利恵（かわもと りえ）令和4年度生活文化博物館学芸員

臣秀吉、徳川家康、上杉謙信、武田信玄）が描かれた幟を選んだ。

節句に関する資料としては、過去の特別展で使用した資料から選び、版本3点と錦絵5点とした。版本は挿絵の部分を開いておくことを想定しており、別のページの挿絵については複写してパネル化することにした。会期が3か月近くあるため、錦絵については保護のため中間期で実物と複写を入れ替えることにした。前半は3点が実物で2点が複写、後半は2点が実物で3点が複写とした。このことは展示目録内とキャプションにも明記することにした。これらの版本および錦絵は、大学附属図書館（以下、「図書館」という。）のコレクション「大江文庫」から借用した。

また、運営委員会で提案のあった節句料理については、実物は展示できないので参考図書から版本の挿絵を選び、図書館所蔵の書籍からは雛祭り子どもの日、七夕にちなんだアイデア料理を選び、複写してパネル化することにした。

なお、雛人形とともに飾られることがある高砂人形や上巳・端午の節句に飾られることがある天神人形も参考として展示することにした。

3. タイトルの決定

展示資料が雛人形と武者人形が中心となるので、節句名でいう「上巳」と「端午」は取り入れたいが、日常では馴染みのない言葉のため副タイトルにまわすことにし、まず副タイトルを「上巳と端午の節句飾り」とした。今回の主題として節句とは子どもたちの健やかな成長を願う行事とともに老若男女の健康を願うという儀式であるという視点を据えていることから「願う」は「祈る」ことでもあると変換し、人形が祈りの目に見える形と捉え、タイトルは「祈りの形」とした。

4. 展示構成

三部構成とし、まず節句についての解説が必要なので、「五節句」を第1部とし、第2部は「上巳の節句飾り」として雛人形を、第3部は「端午の節句飾り」として武者人形を配置することにした。第3部には参考としての高砂・天神人形も含めた。

展示資料は、版本3点、錦絵5点、雛人形45点、武者人形等8点、高砂人形4点、天神人形4点の計69点となった。

構成は下記の通りである。

- 第1部 五節句
- 第2部 上巳の節句飾り
- 第3部 端午の節句飾り

毎週開催している博物館定例会議内で、展示の内容や進捗状況の説明をし、印刷物についても、解説文を筆者の執筆で掲載したい旨を説明し、館長にはあいさつ文を依頼した。その後の状況も、定期的に報告した。

5. 印刷物

今回は立体的な資料のため、1日間の予定で印刷所にカメラマンの手配を依頼し、7月22日（金）に写真撮影をした。大江スミ記念棟3階にある学院史資料室（旧書道教室）へ前々日に資料を搬入し、七段飾りは組み立てに時間がかかるため前日に組み立てておいた。その他の資料についても梱包されているものは開封し、大きなものから順番に机の上へ並べておいた。

撮影は順調に進み、午後3時には終了した。終了後の資料は再梱包し、展示作業が始まるまでそのまま保管することにした。

(1) チラシ

チラシは発行部数を例年通り3,000枚とした。表紙にはカメラマンの意向で人形たちを集合させた写真があり、それを中央に配置した形式とした。チラシの裏面には例年通り、あいさつ文と展示資料の一部を掲載した。8月31日（水）に入稿し、10月20日（木）に納品となった（写真1）。

チラシ裏面（写真2）は、あいさつ文と資料写真6点、町田・三番町両キャンパスの地図を配した。



写真1 チラシ表面



写真2 チラシ裏面

(2) 展示目録

展示目録の表紙(写真3)には、メインとなる雛人形と武者人形を1点ずつ配置した。当初斜めに配置することは決めていて隙間を空けていたが、間が抜けた感じになってしまったため、重なるように配置し直した。内容は、あいさつ文、筆者による解説文、各資料の説明、展示資料一覧という形式とした。

8月31日(水)に入稿し、10月20日(木)に1,000部納品となった。納品後内容の確認をした際に、誤字が見つかり、正誤表を作成して差込みをした。



写真3 展示目録表紙

(3) 解説パネル・垂れ幕

三番町のロビーに展示するパネルは、展示目録の解

説文を要約し、節句飾りの文章の部分に雛人形や武者人形の写真を挿入して、A1判のパネル3枚とした。

垂れ幕は、これまで展示資料のうちの1点を大きく載せていたが、今回メインとなるのが雛人形と武者人形であるので、それぞれの目玉資料の七段飾りの雛人形とケースに入った武者人形の写真を上下に組み合わせた。

6. 展示作業

(1) パネル展示

印刷物、解説パネルと垂れ幕が10月20日(木)に納品となり、三番町用の大判印刷したポスター、パネル類とチラシ、展示目録を梱包し、21日(金)に学内便で配送した。翌週の10月24日(月)に三番町の1号館ロビーで展示作業を行った。壁面を利用したパネル展示として事前に壁面の利用依頼をしていたので、まず垂れ幕を向かって右側へ掛け、空いた空間の中央上段にあいさつ文のパネルを掛け、下段に解説パネル3枚を並べて掛けた(写真4)。また、垂れ幕のそばに机を置き、チラシと展示目録を置いた。机の前には大判複写したポスターを貼り(写真5)、本展示の



写真4 パネル展示風景



写真5 机の上に置いた印刷物

会期が終了するまでそのままとした。

作業中、学生たちの姿はあまり見かけなかったが、今回の垂れ幕は鮮やかな色あい、人形も目を引くため、時折少し足を止めていく様子が見られた。

(2) 本展示

パネル展示の作業と同時に、本展示会場である町田の博物館展示室での作業が始まった。まず企画展の片づけを行い、学院史資料室から資料を搬入し10月26日（水）から展示作業に入った。

当館には、全体がガラス張りの「大ケース」と、大ケースの高さ半分あたりから上部がガラス張りの「中ケース」、上からのぞき見る高さの「のぞきケース」、中ケースの幅半分の大きさの「柱ケース」と称する4種類の展示ケースがあり、計画していた位置に展示ケースを移動してから、それぞれのケースへ資料を振り分けていった。

入口を入って窓側に向かう壁面に中ケース2台を並べ、版本（写真6）と錦絵（写真7）をそれぞれ入れた。続く窓側にはベニヤ板を組み立てた台を置き、黒色の布で覆って七段飾りの雛人形（写真8）を飾り、パーテーションで囲った。柱を挟んで窓側に沿って中ケースを2台並べ、先のケースには展示台を使って段を作り、内裏雛・三人官女・五人囃子・雛道具（写真9）を入れ、次のケースには流し雛や布製、陶器製などの雛人形を入れた。続いて大ケース1台を並べ、展示台で段を作り、大きさのある内裏雛・三人官女・右大臣・左大臣の土人形（写真10）を入れた。そこから直角に曲がり、中ケース1台と柱ケース1台、中ケース1台を並べ、各地の土人形の雛人形を入れた。さらに直角に曲がり、大ケース2台、柱ケース2台、中ケース1台を並べ、それぞれに武者人形（写真11）を、陣羽織付き兜飾りと兜飾り、土人形の武者人形（写真12）を、簡易な組立式鯉のぼりを、ガラスケースに入った高砂人形を、土人形の高砂と天神（写真13）を入れた。それに向かい合う壁面には戦国時代の5人の武将を描いた幟（写真14）を木製の棒に掛けて吊るした。この幟は長さが9メートルもあるため、斜めに掛けていったので裏面が表にでてきてしまう部分もあったが、両面に同じ絵柄が描かれているため、あまり違和感なく飾ることができた。その壁面に沿った柱には、長さ3メートルの鍾馗図の幟（写真15）を天井ぎりぎりに画鋏で固定し、すこしたわませるようにして固定した。

そして中央に中ケース1台とのぞきケース1台、のぞきケース3台をそれぞれ背中合わせにして島を作り、

2台の方にはそれぞれ各地の土人形を入れた。3台のうち1台には土人形を、1台には張り子人形と現在の簡易な雛人形（写真16）をそれぞれ入れた。向かいの壁面には、版本やレシピ本から雛祭りや子どもの日、七夕にちなんだ料理の写真パネルを貼った。

12月16日（金）には、閉館と同時に錦絵と複写の交換を行った。



写真6 版本



写真7 錦絵



写真8 七段飾りの雛人形



写真9 内裏雛・三人官女・五人囃子・雛道具



写真13 高砂と天神



写真10 内裏雛・三人官女・右大臣・左大臣



写真14 武将を描いた幟



写真11 武者人形



写真15 鍾馗図の幟



写真12 兜飾りと武者人形



写真16 張り子の雛人形と簡易な雛人形

7. 広報活動

本学教職員には、チラシや展示目録を配付し、学生には本学構内にポスターを掲示して周知をはかった。また、エントランスの管理棟の入口（写真17）と第3号棟の入口、図書館の入口に垂れ幕を掛けた。なお、各新聞社、博物館、各県の教育委員会などの関係機関へチラシ、展示目録の配送を行った。

配送のおかげか町田市・相模原市に配られるタウン誌である株式会社ポストウェイから取材を受け、令和5（2023）年1月6日（金）発行の「町田ショッパー」新年号に記事が掲載された。また、本学のプレスリリースに掲載してもらったところ、令和5（2023）年1月23日（月）発行の朝日新聞社の定年時代に記事が掲載された。



写真17 管理棟入口の垂れ幕

8. 特別展開催

見学者に対しては事前予約を中止し、マスク着用と手指の消毒は引き続き促すことにした。

開催の週末11月12日（土）に1日だけだが2年ぶり

にKVA祭（大学祭）が開催された。当日、11時からギャラリートーク（写真18）を行い、開始時には3名だったが、途中から数名加わり最終的には7名の方が参加して下さった。13時から1回目のワークショップで製作キットを使用して雛人形を作成（写真19）した。10名の参加者が挑戦したが完成までの想定時間1時間では終われず、残りの作業は持ち帰って行ってもらうことにして終了した。14時半からの2回目のワークショップでは製作キットを使用して武者人形を作成（写真20）した。9名の参加者が挑戦し、3組は1時間以内に完成していたが、終わられなかった方には持ち帰ってもらうことにして終了した。ワークショップの参加者は親子連れや夫婦で、または1人で色々だったが、「久しぶりに手作りして楽しかった。」などと声をかけていただき、企画してよかったと安堵した。



写真18 ギャラリートーク



写真19 ワークショップ（雛人形）



写真20 ワークショップ（武者人形）

おわりに

今回は企画を考えていたときから、時期が合わないことを疑問に思う人がいるだろうと予想しており、やはりそういう方もいたが、人形が魅力的だと見てくださる方が多かった。筆者もかわいい人形がたくさんで楽しいという気持ちが大きかったが、節句について調べているうちに、ウィルスが原因で病気になるなど全く知らない昔の人々が旬のものを食べることによって

英気を養い、休養をとることで罹患しない体づくり、今でいう免疫力を高めることを推奨し実際に行っていたということがわかった。自然とともに暮らす中で得て代々受け継がれてきた知恵である。古臭いことと切り捨てず、見直す機会としてもらえたら幸いに思う。

最後に、多大なご協力をいただいた関係各位に深く感謝申し上げます。

<VI 展示研究報告 (4) >

令和4年度第15回企画展
「学生成果展」

小川 圭子*¹ 澤田 雅彦*² 富田 弘美*³ 佐々木 麻紀子*⁴
花田 朋美*⁵ 馬場 美和子*⁶ 江川 賢一*⁷ 加藤 理津子*⁸

令和4年度第15回企画展「学生成果展」(会期：令和5(2023)年2月20日(月)から4月28日(金))を開催した。内容は学生の卒業制作や実習・演習で作した作品や研究報告を紹介している。

1. 現代生活学部生活デザイン学科

小川 圭子

はじめに

生活デザイン学科住生活デザイン分野の卒業研究は、卒業制作と研究論文に分けられ、そのどちらかの方式で指導される。令和4年度は13名中、12名が設計を選択し、自ら課題を見つけ、それを建築で解決する方法を考察し、作品として表現する制作に取り組んだ。今回は、学生成果展において展示した卒業制作3作品の概要の報告である。

「Airport X 羽田空港に隣接する飛行機観望施設」

上田 馨

上田さんは、羽田空港に隣接する飛行機観望施設として、ホテルやレストラン、室内プールを兼ね備えた複合施設の設計に取り組んだ(写真1)。

計画場所は、東京都大田区にある城南島海浜公園の一角である。この地は、対岸にある羽田空港から飛行機の離着陸の様子を眺めることができる。近辺は交通量が多いものの公園内には砂浜やオートキャンプ場、ドッグランなどがあり、人々の憩いの場となっている。

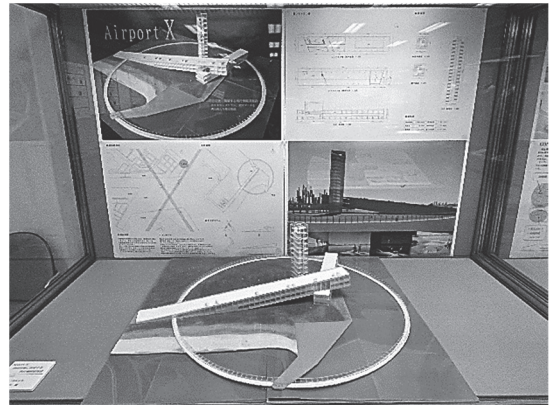


写真1 展示風景

また、この地は、羽田空港から離発着する飛行機の2つの航空路が交差する海上のすぐ近くにあり、そのスポットが可視化できるよう、当該施設も線状に計画し、その2棟を交差させて敷地内に配置している。さらに、建物の立面形状についても、飛行機が飛び立つ高揚感を表現するため、周囲の埋立地の景観に配慮しながら、建物を滑走路に見立て、スラブには勾配を付け、スピード感とダイナミックさを表現している(図1)。

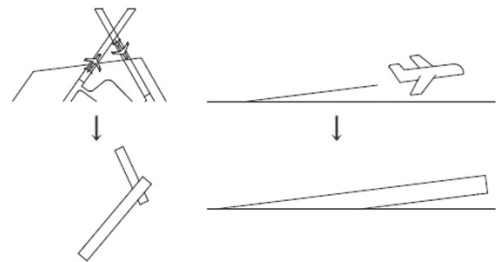


図1 ダイアグラム

*¹ 小川 圭子 (おがわ けいこ) 令和4年度現代生活学部生活デザイン学科准教授
 *² 澤田 雅彦 (さわだ まさひこ) 令和4年度現代生活学部生活デザイン学科准教授
 *³ 富田 弘美 (とみた ひろみ) 令和4年度現代生活学部現代家政学科准教授
 *⁴ 佐々木 麻紀子 (ささき まきこ) 令和4年度現代生活学部生活デザイン学科助教
 *⁵ 花田 朋美 (はなだ ともみ) 令和4年度現代生活学部現代家政学科准教授
 *⁶ 馬場 美和子 (ばば みわこ) 令和4年度現代生活学部非常勤講師
 *⁷ 江川 賢一 (えがわ けんいち) 令和3年度人間栄養学部人間栄養学科教授
 *⁸ 加藤 理津子 (かとう りつこ) 令和3年度人間栄養学部人間栄養学科准教授

中央に重なり合う部分の1階には、その上部が吹き抜けたホテルのエントランスが位置し、レストランが隣接している。このレストランは、宿泊者以外も使用できる。2階は男女別の更衣室の奥に室内プールを配置している。重なっている上のボリュームは、ホテルの宿泊棟である。飛行機の離発着をイメージした建物のため、傾斜した屋上は、来客用の駐車場として使用できる。また、この傾斜を建物内部にも生かすために、客室前の廊下は、スロープとして処理し、隣り合う客室は、断面図でも確認できるように階段状になっている（図2）。



図2 断面図

また、建物を取り囲むように周囲には屋根付きの円形のプロムナード（散策路）があり、その一部が海へ張り出すことによって、より上空で交差する飛行機をより間近で観望できるようになっている。さらに、地上だけではなく、高い位置からも観望できるように、エレベーターが付いた二重螺旋の階段から成るガラス張りの展望塔も設けている。

空港近辺ならではの立地と様々な角度から、離着陸する迫力のある飛行機を観望できる施設であるが、そうした当初のコンセプトの軸がぶれることなく、それらが統合された形となって表現できているように感じられる。余計なものを排除し、なるべくシンプルな構成にまとめているからこそ、その設計意図がより伝わる力作となっている。

「相互作用 de 菜園 ～世代間交流を目的とした幼稚園と老人ホーム～」

福室 友希

近年、都市の緑化が減少する一方で市民農園の開設が増えている。市民農園とは、サラリーマン家庭や都市住民が、レクリエーションや生き甲斐づくり、生徒・児童の体験学習などの多様な目的で、小面積の農地を利用して野菜や花を育てるための農園をいい、現在では、市町村や農協、農業者、企業等が主体となり市民農園を開設している。市民農園には大きく分けると都市住民が自宅から通って利用できる「日帰り型市民農園」と宿泊が可能な施設を備える「滞在型市民農園」がある。

福室さんの卒業研究は、この市民農園を通して幼稚園と老人ホームを結び付け、相互の世代間交流を実現する施設の提案である（写真2）。



写真2 展示風景

計画地は、埼玉県所沢市を選定した。この地は、高齢化率が10年間で6%増加しており、市内の幼稚園で園内に菜園があるのは37%あったが、菜園を用いた交流を行っている園は見られなかったためである。さらに、介護相談の問い合わせが増加していることもあり、気軽に地域の人々とコミュニケーションをとれる居場所が暮らしやすいまちづくりに繋がると作者が考えたからである。

高齢者にとって菜園は、運動不足の解消や生活能力の維持に役立ち、子どもにとって菜園は、身近に菜園があることで食べ残しを減少させ、野菜を育てることに興味を持ち、手伝おうとする意欲を持たせることができる。また、高齢者と子どもの間においても活力や知識の交流など、菜園を通した相互作用を期待することができる（図3）。

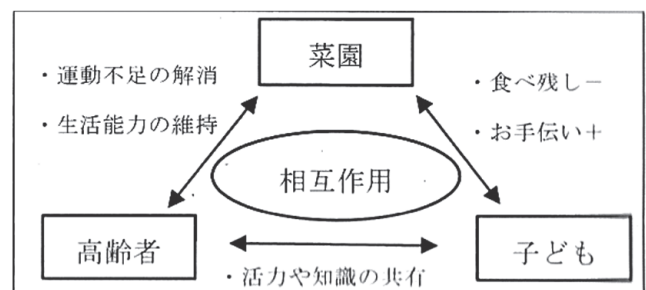


図3 コンセプト

壁面よりもひと回り大きい葉っぱ状のシャープな屋根が敷地に散りばめられ、軽快なデザインとなっている。

建物の北側に保育園として、保育室、職員室が、それと隣接するように南側に老人ホームの各室やその居室、さらに南の大通りに面する付近には、地域交流スペースがあり、高齢者や子ども以外の地域に開放されたスペースを計画している。これらの複数棟の建物の間には、4つの園庭と1つの菜園があり、屋根が張り出している部分は雨天時にも活動できる屋外空間となっている。この部分をウッドデッキにすることで、子どもたちの遊びの空間となり、また、菜園で収穫したものを食べることができる屋外の食事スペースも備えている（写真3）。



写真3 模型写真

現代社会の農業に関する問題に着目し、市民農園の現状を理解し、それを世代間交流の一つのツールとして取り入れている点が優れている。さらにその形は、ダイアグラムに沿って、菜園を中心とした施設がデザインされ、かつ、とても軽快にまとめ上げた作品である。

「水鏡箱 回遊性・散策性のある文豪図書館」

鈴木 杏奈

明治以降、文京区には多くの教育機関が設けられ、特に学問の最先端であった帝国大学（現・東京大学）周辺には、多くの学者や作家が住み、この地を舞台に多くの作品が著され、近代文学の発信地となった。この展示作品は、こうした文教の町である文京区で、学生が調査・研究するために訪れたり、文豪たちの足跡を辿った観光を楽しんだりすることのできる美術館・図書館を計画し、地域の活性化を図ることを目的としている（写真4）。

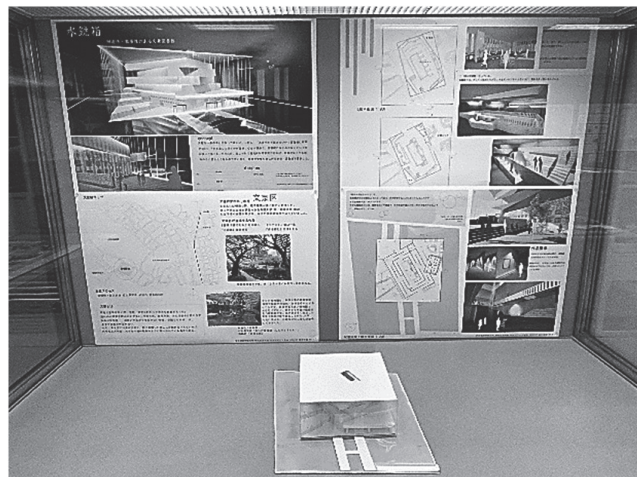


写真4 展示風景

計画地は、日本で最古の植物園であり、数多くの小説の舞台にもなった小石川植物園と歴史ある播磨坂さくら並木の間に位置する。

建物は、積み上げられた書物をイメージし、それをガラスの箱で覆うように入れ子構造となっている。1階には、美術館やカフェ、2階・3階には図書館が計画されている。各階の階高や敷地の広さから、イメージとして積み上げられた書物2層分で1フロアを構成している（写真5）。中央部には、3階まで続く大きな吹抜空間が美術館・図書館を貫き、その天井には、トップライトを通じて館内に光が降り注ぐ。

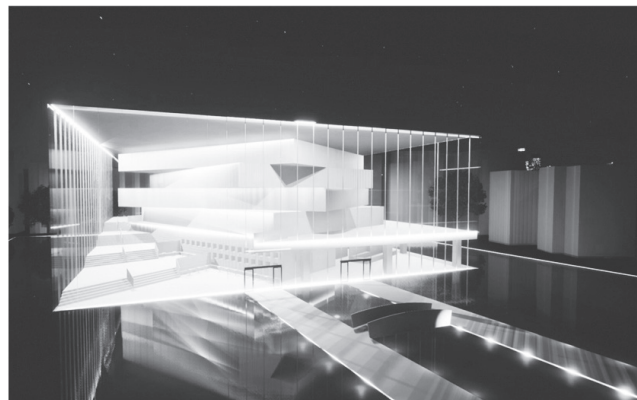


写真5 全景（夜景）

1階にある美術館には、常設展示空間の奥に企画展示室と文豪にちなんだ菓子を提供する座敷のあるカフェが配置されている。美術館の常設展示部分は、展示のための壁が迷路のように計画されており、中央にある開けたスペースの上部は吹抜になっていて、朗読会やプロジェクターを使ったイベントが開催できるよう計画している。2・3階の図書館は、本を楽しんで見つけてもらえるよう、あえて段差を多く取り入れ、

高低感を付けることで、新しいものに出会える期待感を高めることができるよう工夫している。また、階段状の3つの小山が休憩スペースになっている。そこでは、好きなところに座り、寝転んだりしながら、休憩や読書等を行うことができる。

この作品は、回遊性、散策性がテーマとなっている。図書館に行き着くには、正面の入口から入り左手に曲がり、緩やかな階段を上り、美術館の入口の裏側まで回って、入ることになる。アプローチにこれだけの空間を使って演出し、この吹抜の周りを回遊するよう、各階の動線が定められている。

さらに、入れ子構造にすることで、建物の内部であっても、開放的な半外部空間を感じることができる。階段を用い、空間に変化を与え、ガラスの箱を被せることで、この中間領域を上手く美術館・図書館という用途に組み込み、入れ子構造の特徴を上手く生かしている（写真6）。



写真6 エントランス内部から外部を見る

2つの施設をすっぽりとガラスの箱に収め、回遊性や散策性をもたらす仕掛けを上手く共存させ、全体的にも余裕のある構成となっている作品である。

2. 現代生活学部生活デザイン学科

澤田 雅彦

ものづくり演習A課題2「木で曲面を作る」

「ものづくり演習A」は生活デザイン学科2年次開講の専門科目である。授業の目的は、いろいろな材料と方法で、さまざまなものを作り、手を動かしながら材料や作り方について理解を深め、デザインの基本である自分の考えたことを具体的な形にする術を身につけることである。特に、できる限りお膳立てのされていない状態から、一定の条件を満たした形を作り出すことにより、カタチを作ることについて体験を通して考えてもらうことが重要だと考えている。

令和4年度学生成果展で作品を展示した「木で曲面を作る」は、「ものづくり演習A」の2番目の課題である。課題の内容は、「きれいな曲面と平面で構成された、きれいな形をつくること」を目標に、木を削って、四角柱の6つの面のうち4面が曲面になったような形を作ることである。形を構成する6つの面は、以下のような面であることを条件にしている。

- 1：ふくらんだ面（球面状にふくらんだ面ではなく一方向は直線の面）
- 2：へこんだ面（球面状にへこんだ面ではなく一方向は直線の面）
- 3：ねじれた面（一方向は直線でその直線の方向が変わる面）
- 4：完全な平面
- 5と6：特に指定なし

このうち1・2・3の面については授業の中で、短冊状に切ったケント紙を曲げたりねじったりしてできるような面と説明をした。そして6つの面を作りながら、きれいな面とはどのような面なのか、きれいな形とはどんな形なのかということを考えて制作を進めるよう指示をした。

材料は製材された木ではなく、剪定された木の丸枝（長さ100～120mm太さ40～50mm程度）を使用した（写真1）。展示された作品の材料は、主に学内のケヤキの枝を剪定した丸枝で、担当教員が大学裏山の廃棄場所から拾ってきたものである。そのほかに、ツバキと樹種が不明の材料（おそらく広葉樹）もあった。



写真1 材料の丸枝（長い枝を切断）

学生は木を削る作業をほとんど経験したことがない。ましてや樹木から切り取った丸枝を自らの手で削って作品を作るということは、おそらくこの先経験することはないだろう。しかし木材は、生活の中では身近で重要な役割を果たしている材料の1つである。そのような材料を自らの手で加工することにより、木

の特徴を体験的に理解することができると考えており、それがこの課題の目的の1つである。丸枝の材料は樹皮がついたままの自然に近い状態の材料のため、亀裂や節があったり、木目が複雑だったりして、木の特徴を如実に体験することができる。木の中から虫が出てきて授業中に大騒ぎになることもあるが、そういったことも木の特徴であるし、節や複雑な木目があれば、表情に変化のある面を作ることができる。使用した木が比較的堅い木だったため、丸枝から四角柱に近い形を削り出すのは大変な作業であり、力と根気が必要で手間もかかる。手が痛くなったと訴える学生も多い。それでも学生は熱心に作業に取り組み、1回90分の授業7回で作品を完成させることができた(写真2)。



写真2 完成作品の一例(写真1の材料から制作)

木の加工は木工用のヤスリと紙やすりで行き、仕上げは目の細かい紙やすりできれいに磨いた後、エゴマ油によるオイル仕上げか、そのまま素木の仕上げとし



写真3 博物館での展示状況

ている。(写真2の作品は素木の仕上げである。)最初のうちは木工用ヤスリをうまく使えなくても、何回か授業を重ねるうちに使い方のコツをつかみ、最後には上手に木を削れるようになった学生も多い。そういった作業を通じて、自然の中の無秩序な形から、自らの手で自分が考えた「きれいな形」を作り出すことを体験し、形を作ることの面白さと意義を少しでも感じてほしいと考えている。

作品の完成後は、制作意図や手順、感想と作品の写真をまとめたレポートも作成した。博物館の展示では、そのレポートもあわせて展示をした(写真3)。

3. 現代生活学部生活デザイン学科

富田 弘美
佐々木 麻紀子

ブラウスのデザイン・制作

2年生後期の科目「服飾造形実習B」のブラウスの課題は、好みのデザイン(用途・フォーム・色彩・材料など)を考えて自分らしさを表現することである。学生たちは、1年生後期の「アパレルデザイン論」で襟と袖のディテールデザインを収集し、2年生前期の「アパレル設計論」では袖や襟のフォーム別分類、袖の運動機能性、身頃原型の製図と縫製・試着、胸ダーツの移動、袖と襟の製図などと段階を追って学び、応用デザインとしてブラウスの作品を制作した。

1. フレアギャザーブラウス

生活デザイン学科 2年生 大城 柚葉

デザインの特徴は、タイトスカートと合わせて着装したときに、フレアで広がった裾がウエストの細さを強調させて、短い前身頃はウエスト位置をより高く見せることである。また、バストラインよりやや上の切替えラインから裾へとフレアギャザーが広がっており、ブラウス丈は前身頃ではウエストライン丈だが、サイドから後ろ身頃にかけて徐々に長くなっている(写真1)。袖は肩先で10cmダウンさせてゆったりとした広がりをもたせ、襟は3cm幅のボウカラーで、前から見るとスタンドカラーのように見えるが後ろにボウ(リボン)がある。素材と生地名は、綿100%のブロードでワイン色である。



写真1 フレアギャザーブラウスの前身頃（左）と後ろ身頃（右）

2. 韓国風大人ブラウス

生活デザイン学科 2年生 馬場 怜名

デザインの特徴は、襟先が長く尖ったバリモアカラーの台襟をボタンで留め、Vラインのデコルテで胸元の肌を出したセクシーなおしゃれ着である(写真2)。また、大きなバルーンスリーブが女性らしい柔らかさを表現したガーリーさをプラスしている。なお、バリモアカラーはハリウッドスターのジョン・バリモアが好んで着用していたことから、襟先がとても長く鋭く尖ったシャツカラーをいい、ダンディーカラーともいう¹⁾。

デザイン構成は、Vラインは前身頃の中心で12cm下げ、台襟付きシャツカラーの襟先の長さは15cm、バルーンスリーブの膨らみは、カウスの長さの約3倍である60cmにギャザーを寄せている。素材と生地名は、ポリエステル100%のシャンタンで淡いベージュである。

¹⁾ FASHONSNAP <https://www.fashionsnap.com/dictionary/barrymore-collar/>



写真2 韓国風大人ブラウス

3. 花柄の長袖シャツ

生活デザイン学科 2年生 佐々木 都

デザインの特徴は、台襟付きシャツカラーとカウスに黒布で差し色をし、前後身頃のウエストにはタックを入れて細身に見えるようにした。また、ボタンは前中心に2種類の花形のボタンを交互に4つ付け、袖はセットインスリーブである(写真3)。

コーディネートは、柄シャツなので無地のパンツやスカートに合わせ、春らしい花柄は気温の低い夏でも着用できる。さらに、袖口のギャザーの膨らみはレトロガーリーな雰囲気を出ているので友達と遊びに行く時の着装をイメージしている。素材と生地名は、綿100%のブロード(花柄、黒)である。



写真3 花柄の長袖シャツ

4. バルーンスリーブのブラウス

生活デザイン学科 2年生 西田 満音

デザインの特徴としては、袖口のギャザー量はカウスの長さの3倍以上約70cmで袖口を大きく膨らませ、袖山は肩から10cmダウンさせ、その位置にもギャザーによる膨らみを入れて袖を強調している。シルエットは、胸ダーツを裾へ移動し、揺れ動くフレアが入ったAラインのオーバーブラウスである。また、やや幅広のフラットカラーは、全体を大人可愛い服装にまとめている(写真4)。

生地は、針の先のような小さな水玉模様(ピン・ドット)で、遠目には無地に見えるが近づいて見ると控えめな上品さを感じさせる。素材と生地名は、ポリエステル100%のローン(白)にピン・ドット(黒)がプリントされている。



写真4 バルーンスリーブのブラウス

5. 何にでも組み合わせ万能なブラウス

生活デザイン学科 2年生 川合 ひな

デザインの特徴は、ブラウス丈がウエストライン（WL）丈なので、ボトムスにスカートやパンツなど何を組み合わせてもWLの位置は一致する。すなわち、トップスとボトムスのバランスが良く、胴長に見えたり、丈長に見えたりしないブラウスである（写真5）。

また、一見シンプルな白いセットインスリーブと台襟付シャツカラーのブラウスに見えるが、カウスや左身頃の前立て、台襟の裏などにアクセントとしてタータンチェックの生地を用い、ボタンを外すと内側からチェックが見えるデザインである。素材と生地名は、ポリエステル65% 綿35%の白のT/Cブロードと綿100%のタータンチェック（ベージュ・黒）である。



写真5 何にでも組み合わせ万能なブラウス

4. 現代生活学部生活デザイン学科

花田 朋美

テキスタイル加工演習

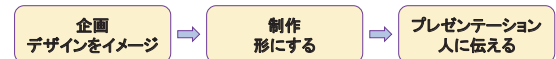
「テキスタイル加工演習」は生活デザイン学科の2年次に開講されている。耐薬品性などの各種繊維の性質を応用してテキスタイルにデザインの・機能的な付加価値を付与するための加工法について体験を通して理解する授業である。特にデザイン性を付与する加工については、テキスタイルデザインの考案と加工理論や技術について学ぶと同時に、テキスタイルの特性を生かした作品制作を行っている。

作品を企画し制作する経験を通して、イメージしたものを形にすることの楽しさと難しさ、作品についてプレゼンテーション発表をする経験を通して、制作意図を人に伝えるためには準備と工夫が必要であることを学んでほしいと考えている。

2022年度 テキスタイル加工演習

【授業概要】

繊維の性質を応用してテキスタイルにデザイン性を付与

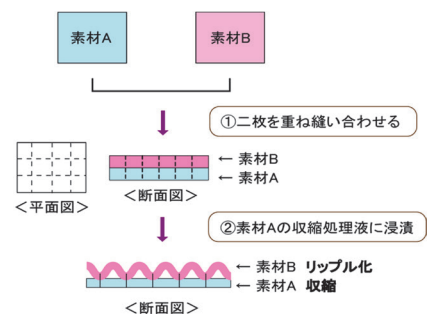
↓
テキスタイルデザインを生かした作品を企画し、制作する↓
制作意図をレポート及びプレゼンテーションにより人に伝える

1. 繊維の耐薬品性の相違を応用した加工(1) 一綿の収縮加工ー
2. 繊維の耐薬品性の相違を応用した加工(2) ーオパール加工ー
3. 特殊素材の加工 ーアルミ蒸着布ー

繊維の耐薬品性の相違を応用した加工(1)

【綿の収縮加工】

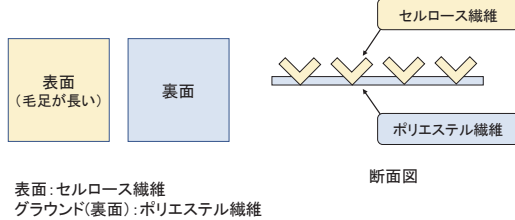
1. 収縮加工の方法



繊維の耐薬品性の相違を応用した加工(2)

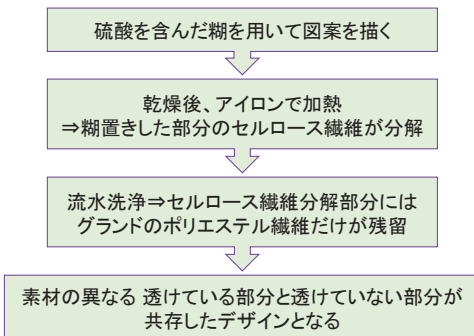
【オパール加工】

1. 布の構造



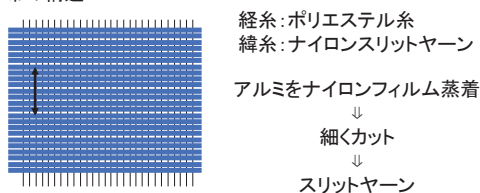
2. オパール加工の方法

セルロース繊維が酸で分解する性質を利用する加工法



特殊素材の加工 アールミ蒸着布ー

1. 布の構造

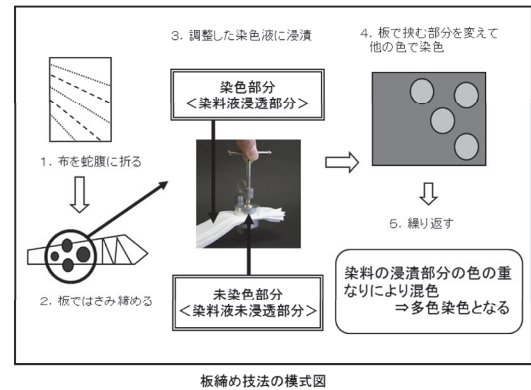


2. 浸染染色によるデザイン

染料が染み込む部分と染み込まない部分を作り、模様を描く

板締め…布の一部を板で挟んで染料が染み込まないようにする方法
絞り染め…布の一部を縛り染料が染み込まないようにする方法

板締め技法例



出展作品 (写真1 参照)

- 中道静空「巾着型バック」
繊維の耐薬品性の相違を応用した加工(1) ー縛の収縮加工ー
- 馬場怜名「夏用の巾着」
繊維の耐薬品性の相違を応用した加工(1) ー縛の収縮加工ー
- 山本美久「和風バック」
特殊素材の加工 ーアルミ蒸着布ー
- 佐村真衣「ポーチと巾着袋」
繊維の耐薬品性の相違を応用した加工(1) ー縛の収縮加工ー
- 菅麻菜美「巾着」
繊維の耐薬品性の相違を応用した加工(1) ー縛の収縮加工ー

出展作品 (写真2 参照)

- 馬場怜名「亀」
繊維の耐薬品性の相違を応用した加工(2) ーオパール加工ー
- 大城柚葉「ハート型のいす用座布団」
繊維の耐薬品性の相違を応用した加工(2) ーオパール加工ー
- 中道静空「ジンベイザメのクッション」
繊維の耐薬品性の相違を応用した加工(2) ーオパール加工ー
- 西田満音「古着も活用したクッションカバー」
繊維の耐薬品性の相違を応用した加工 ー縛の収縮加工・オパール加工ー
- 馬場怜名「ひまわりのクッションカバー」
特殊素材の加工 ーアルミ蒸着布ー

出展作品 (写真3 参照)

- 大城柚葉「ティッシュカバー」
繊維の耐薬品性の相違を応用した加工(1) ー縛の収縮加工ー
- 中道静空「和服用アクセサリ」
特殊素材の加工 ーアルミ蒸着布ー
- 大城柚葉「チューリップとシュシュ」
特殊素材の加工 ーアルミ蒸着布ー
- 西田満音「リメイクジーンズ」
特殊素材の加工 ーアルミ蒸着布ー
- 佐村真衣「レモンのクッションカバー」
繊維の耐薬品性の相違を応用した加工(2) ーオパール加工ー

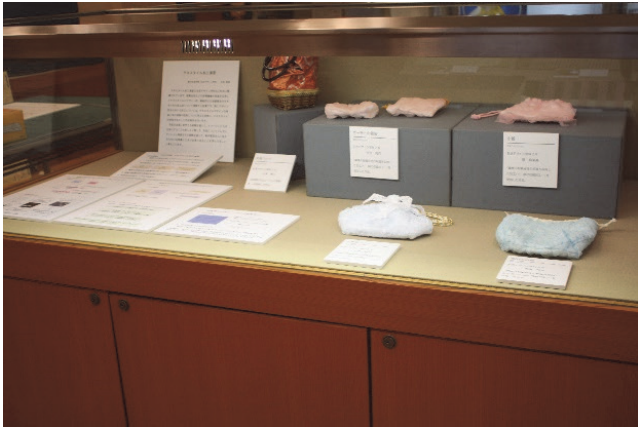


写真1 展示風景（バッグ）



写真2 展示風景（クッション）



写真3 展示風景（アクセサリー他）

5. 現代生活学部生活デザイン学科

馬場 美和子

生活デザイン学科では、2年次織物の基礎を学ぶ授業を、3年次前期後期に様々な織物技法を学び、ファッション・インテリアファブリックデザインの設計と製織を学ぶ授業を開講している。2年次後期に開講する「ウィービングデザイン演習A」は、テキスタイル材料学で学んだ織物に関する基礎知識を基に卓上機を使用して理論と実践を学ぶ。授業では、織物三原組織（平織・斜文織・朱子織）の色彩効果の製織と「食を彩る布」をテーマにランチョンマットを製作した。講評会では、ランチョンマットに料理を載せて写真を取りプレゼンテーションを行った。（写真1、2）作品展では、織物三原組織の布とランチョンマットの展示をした。（写真3、4）



写真1 馬場怜奈さんのプレゼンテーションとラン
チョンマット



写真2 佐々木都さんのプレゼンテーションとラン
チョンマット



写真3 展示風景（平織・斜文織色系効果のサンプル布）



写真4 展示風景（テーマによるランチョンマット）

3年次前期に開講する「ウィービングデザイン演習B」は、織物三原組織の応用である変化組織や二重織の技法を学び、卓上機を用いて糸、デザインを工夫した布見本を制作し、ミニポーチ（写真5）を作った。また二重織で織る無縫製のきんちゃく袋（写真6）を天然染料すくも藍で染めた。



写真5 澤田紫月海さんのミニポーチ



写真6 江成香音さんのきんちゃく袋

3年次後期に開講する「ファッション・インテリアファブリックデザイン演習」は、ウィービングデザイン演習で織った様々な布を参考に、イメージに合うファッションまたはインテリア布の企画を立て、プレゼンテーションボードを作成し、サンプルを織り、そのデータを元に卓上機、または高機で作品制作することで用途に応じたテキスタイル設計のプロセスを学ぶ（写真7）。授業では、マフラー、ショール、クッションカバーを制作した（写真8、9）。

Longing for Spring

テーマ「春」をイメージし、色や形、質感、素材の組み合わせを表現する。



写真7 中道静空さんのプレゼンボードと作品



写真8 展示風景（ミニポーチと巾着袋、自由作品）



写真9 展示風景（自由作品）

6. 人間栄養学部人間栄養学科

江川 賢一

令和4年度実践栄養プロデュース実習（運動生態学研究室）

令和4（2022）年度学生成果展に運動生態学研究室で実施した実践栄養プロデュース実習の成果を出展した。本稿では展示内容の概要を報告する。

運動生態学研究室は運動生態学を標榜したわが国最初の研究室として、平成30（2018）年に開設され、人々の運動と健康に関する教育研究を実施している。昨年度の学生成果展では人間栄養学部人間栄養学科「実践栄養プロデュース実習」において平成30（2018）年に入学した3回生による4題を出展した。「実践栄養プロデュース実習」は管理栄養士として必要な知識・技術・姿勢などをもとに、社会ニーズの把握、実践力向上を目標に、学内外の実験や実習を通して研究レベルまで発展させるため、個々あるいはグループで実習テーマを設定し、実習成果に関する発表会を行う実習であり、3年次と4年次に開講されている。運動生態学研究室では運動に関する専門的技能を習得し、人々の健康増進を運動から解決できることを教育目標として、スポーツ産業、民間企業、行政、学校、医療福祉施設、予防サービス、試験研究教育機関（大学院含む）等への業務に役立つ実践研究を実施してきた。

新型コロナウイルス感染拡大による活動制限が解除されつつある中で、令和1（2019）年に入学した4回生が、昨年度までのテーマを発展させた3題を出展した（写真）。「ジュニアサッカー選手を対象とした強化期の栄養サポートが合宿前後のエネルギー摂取量に及

ぼす影響」（小林涼香、内田梨多）は、スポーツ栄養マネジメントの計画、実施、評価と改善において重要とされるアウトカム評価に取り組んだ。校内授業では対象者の特性に応じた食事計画を立案したり、献立を作成したりしているが、本実習では食事記録から定量化するための手順を理解し、実際に評価を試みることで選手のサポートが有効であるかを考察した。「ジュニアサッカー選手を対象とした栄養マネジメントがカルシウム摂取量に及ぼす影響」（田中乃愛、岡村有希子）は、成長期の選手にとって重要な栄養素であるカルシウムに着目して、選手の日常生活での摂取量と、合宿前後の摂取量を比較することでスポーツ栄養マネジメントの有効性を議論した。これらの取り組みの過程で、現場でのスポーツ栄養サポートの現場に必要な多様な人とのコミュニケーションスキルを磨くとともに、選手、コーチ、保護者などと信頼関係を構築した。「麹甘酒が有酸素運動後の疲労回復に及ぼす影響」（福田侑菜、佐々木恭乃）は、学生が中心となって新たに研究主題を探究した。3年生を巻き込んだ文献研究や予備実験を繰り返し、学部で学修したスポーツ栄養学の専門知識や技術を活かした内容になった。

これらの研究成果の発表を通じて、スポーツ栄養学の普及・発展に貢献することが期待される。



写真 「実践栄養プロデュース実習」パネル展示の様子

7. 人間栄養学部人間栄養学科

加藤 理津子

千代田区におけるSDGs達成に向けた共創的な食育推進に関する研究

1. 研究活動の背景

本学では、千代田区の様々な事象を多様な切り口で調査・研究する「千代田学」に参加し、区と連携して研究活動を行っています。

本事業では、食を介した生産者と消費者とのつながりを強化し、千代田区内での持続可能な生産と消費への取り組みを共創的に推進することを目的に、消費者の生活ベースに即したSDGsに関する食育ツールを開発することとしました。食育ツールは「2.飢餓をゼロに（飢餓）」、「11.住み続けられるまちづくりを」、「12.つくる責任 つかう責任」、「14.海の豊かさを守ろう（生態系）」、「15.陸の豊かさを守ろう（生態系）」、「17.パートナーシップで目標を達成しよう（連携）」に配慮した内容とし、さらに新しい生活様式に対応させデジタル化すること、千代田区の地域特性の一つである江戸文化とSDGsを融合させたものとする、地域の消費者の取り組みを推進するだけでなく、次世代の消費者である小中学生に向けた教育教材として活用することに加え、生産者、消費者のみならず世界と千代田区をつなぐデジタル化食育教材を普及することを目指しました。

2. 令和4年度の活動内容

人々のSDGsに対するイメージおよび意識を把握するため、女子大学生を対象にしたアンケートを実施し、学生が消費者としての視点からまとめました。次にその結果をもとに、「12.つくる責任 つかう責任」つまり持続可能な消費と生産の達成を目指し、和とSDGs、食とSDGsをテーマに食育ツールを開発しました。

和とSDGsでは、使用しなくなった婚礼衣装の和装帯を活用してティーマットにアップサイクルする方法を紹介したデジタル化情報ツールを制作しました。また、このツールを活用して、T中学校3年生の女子生徒を対象に全2回の食育の授業を行いました（第1回20名、第2回21名）。

第1回では、SDGs達成への意欲を高め、SDGsに結びつく食行動を促すことを目的に、SDGsの必要性和食に関わるSDGsについて講義しました。また中学生がグループワーク形式で実行できる行動目標を立案しました。第2回は、和とSDGs（アップサイクル）、食とSDGs（フードロス対策）をテーマに「12.つくる責任 つかう責任」の達成を目指し、持続可能な消費と生産を推進するデジタル化情報ツールを用いた実習（作品制作）を行いました（写真1）。

食とSDGsでは、持続可能な生産やフードロス対策に取り組んでいる生産者（日比谷パレスおよび中西ファーム）との共創によりメニューを開発し、開発したメニューおよびアップサイクルしたティーマットを用いた食育ツールの社会実装を目的に千代田区内の店舗（日比谷パレス）にてメニューの販売およびティー

マットの展示を行いました（写真2）。

本事業に参加した4年生4名、3年生3名は、管理栄養士に必要な素養を身につけるだけでなく、自ら「8.働きがいも経済成長も」、「12.つくる責任 つかう責任」、「17.パートナーシップで目標を達成しよう」を体験する機会となりました。また、事業をやり遂げたことで自己効力感も高まったと感じました。

本事業の情報を「たべちヨダ※」およびYouTube（<https://youtu.be/yucUHn1PPfY>）で公開しました。

※たべちヨダ（<https://tabechiyoda.com/>）：本学の学生が千代田区内の店舗を巡り、取材した記録をウェブ上で公開しているプラットフォームマップ



写真1 中学生の実習の様子



写真2 アップサイクルしたティーマットとSDGsに配慮したメニュー

< VI 展示研究報告 (5) >

令和4年度第15回企画展
「教員研究成果展」

上村 協子*

令和4年度に開催された「教員研究成果展」(会期：令和5(2023)年2月20日(月)から4月28日(金))では、教員の専門分野における研究成果を紹介している。

令和4年度教員研究成果展報告

家政学から「現代生活学」へ

自分流儀の生活創造アプローチ

上村 協子

はじめに 425論文によせて

1985(昭和60)年度の東京家政学院大学に専任教員として着任し第1回ゼミ生から2022(令和4)年度38回生まで、昭和・平成・令和3つの時代にわたる38年間の教員生活で家政学部・現代生活学部の卒業研究の上村ゼミ生は413名。千代田三番町一町田一千代田三番町とキャンパスを行き来した、大学院の修士論文指導は12名であり、卒論413、修論12、合計で425論文を通して多様で豊かな生活者視点の研究アプローチを共に学ぶ機会を頂いたことをまず感謝したい。

本展示によせて(1)家政学から現代生活学への深化に尽力された先生方と学生さんの貢献、(2)上村が研究責任者となった科学研究費助成4件を中心に研究活動内容を整理(写真1)、(3)なぜ公開授業テーマを「自分流儀の生活者の時代」(写真2)としたのかを説明したい。

1. 家政学から生活学科そして現代生活学へ

2015年3月31日東京家政学院大学家政学部は、最後の卒業生を送り52年間の歴史に幕を閉じた。この改組では家政学部や短期大学時代に蓄積された教育研究内容を、2010年に開学した現代生活学部において発展的に展開できたことが成功のポイントであり、亀高京子先生の家政学原論、利谷信義先生の生活法学、

そして天野正子先生の生活思想など先生方の研究内容がスムーズなバトンリレーの大きな支えとなった。

1-1 亀高京子先生(1926-2015)の家政学原論

—家政学と生活科学は同じか—

亀高京子先生は本学家政学原論の授業を恩師松平友子から受け継ぎ日本の家政学原論研究のなかに家政学史の流れを位置づけられた。

亀高先生が日本家政学会家政学原論部会長として日本の家政学をリードされた8年間の家政学原論部会セミナーではテーマに「家政学と生活科学は同じか」「岐路にたつ家政学」などを掲げ家政学の独自性をあらためて考究し続けられた。

1-2 利谷信義先生(1932-2019)の生活法学

—家族と国家と生活政策—

利谷信義学長はKVAルネッサンスの旗をかかげ本学の創立者大江スミの家政学復興に短期大学を閉じ現代生活学部一学部の大学へ発展する道筋を示された。

東京大学社会科学研究所教授時代の著作『家族と国家—家族を動かす法・政策・思想』(1987年 筑摩書房)のはしがきに利谷先生は次のように書かれている。日本の家族は国家の都合に左右されすぎている。もっと家族自体の都合を主張し、それを国家の法や政策に反映させた方がよい。そうしないと私たち自身の生活が行きづまるし、何のために国家があるのか分からなくなる、ということに帰する。この文章に、現代生活学に利谷先生が託した、家族と国家の関係が示されているように思われる。

1-3 天野正子先生(1938-2015)の生活思想

—『老いがいの時代』

天野正子学長は社会学者として本学に地域連携研究センターを設置し卒業成長値を柱に学生参画中心で産

*上村 協子(うへむら きょうこ) 令和4年度現代生活学部現代家政学科教授

学連携活動を軌道に乗せられた。『フェミニズムのイズムを超えて』（1997年 岩波書店）『「生活者」とはだれか』（1996年 中公新書）などで知られた天野先生の最期の著書『〈老いがいい〉の時代－日本映画に読む』（2014年 岩波新書）では、ロウ・アングルに〈老い〉と〈老いがいい〉を日本映画に問う。

老いを有能・無能という一元的な価値から解放した〈老いがいい〉の世界を個性から社会性へ広げて日本社会の全体像をみようとした。誰もがみんな生一老一死に真剣に自分事として向き合う必要がでてきた時代に、学びがいのある現代生活学の方角を示された。

1-4 家政学部現代家政学科消費者教育コース

―通称 マースガールの活躍―

2009年4月入学生1学年だけに家政学部現代家政学科が設置された。家政学専攻に置かれていた「食科学」「ファッションテキスタイル」「ライフマネジメント」などに加え「消費者教育」コースが置かれ、2010年現代生活学部スタートへの準備が始まった。

「かせいがくを学んでいます」というと「宇宙（火星＝マース）の勉強されているのですか」と言われて悔しかったことが通称のマースガールという名前の由来である。消費者行政の新しい組織に関する関係法律が2009年6月に成立公布され同年9月1日、消費者庁が正式に発足した時期と重なった。東京「家政学」院大学「家政学」部「家政学」科「家政学」専攻と、自分の所属・専門に家政学が4つもつく専攻を改組して、消費者ではなく境界線をこえ、生産消費者を育てようとしたマースガールの大活躍は現代生活学の大きな流れをつくることになった。

1-5 2015年の春に

家政学部長の仕事は前任者である江原絢子先生から引き継ぎ、最後の家政学部長として当時現場にいた人間として、家政学から現代生活学へのバトンリレーは、江原先生と3名の先生方と2009年から家政学部現代家政学科消費者教育コースに在学した学生たち（通称マースガール）の貢献の賜物だったことを記しておきたいと考えたことが「家政学から現代生活学へ」と題した本展示の意図するところであった。

2015年3月末日、本学家政学部最後の学生が卒業した3日後2015年4月3日に亀高京子先生が、2015年5月1日に天野正子先生が逝去された。

2. 上村協子（生活経済学）の生活学研究

御船美智子・上村協子 共編著『現代社会の生活経

営』（2001年光生館）を執筆以降、特に生活の論理から要請される社会のあり方を検討することを課題として科学研究費などをうけて生活学研究に取り組んできた。

2-1 相続に見る女性と財産（2002-2003）

①東京女性財団調査から妻と夫の財産所有の実態と意識を解明し、②経済政策研究所調査から資産移転の変容をジェンダー視点で検討し、③農村生活総合研究センター調査から女性農業者の資産形成について焦点をあてて示し、④相続税・贈与税との関係、⑤世代間のつながりを取り上げた。

2-2 女性農業者の資産形成とソーシャル・キャピタル（2005-2007）

女性農業者の資産形成につながる起業活動は、直売やレストラン経営、食育、グリーンツーリズムなど消費者ニーズに直結する傾向がある。安全で安心できる食の提供や、家族や地域の信頼関係構築、生活文化の継承など公益性の強いものが多い。

生活の産業化により生産者と消費者が分断されたことによって発生した生活能力の低下、人間関係の希薄化、生活文化の断絶、地球環境問題などの弊害を是正する。すなわち、女性農業者の資産形成により消費者ニーズにあった公益的要素の強い事業活動が進展すると考えられる。女性農業者の資産形成を指標として、金融をソーシャル・キャピタル形成の媒介として活用する工夫も求められる。

2-3 生活文化の世代間伝承による持続可能な消費 ―消費者教育のパラダイムシフト― (2011-2014)

生活文化ESC (Education for Sustainable Consumption) は世代間伝承による持続可能な消費に関する教育である。大学における5つのアクティブラーニング試行事例により、日本型生活文化ESCの特徴と可能性を整理した。生命の維持・生活の質を重視する生活者の視点から、リカレント（循環）型社会を創造する知の体系生活の価値に関する研究として、経済の量的拡大を基本的価値ないし目標としない、生活文化を捉えた。持続可能な社会を形成するための世代間伝承を生産者と消費者がつなぐ方法として注目した点に特徴があった。

2018年学部3年生7名のゼミ生セブンシスターズのうち4名が家庭科教員免許を取得していた。生活文化ESCの一つの成果物として食品ロス削減をテーマに学生たちが「江戸エコかるた」を作成した。

2-4 現代生活学研究

—生活者がつなぐ食（消費）と農（生産）— (2017-2019)

現代生活学とは、生命の維持、生活の質を重視する生活者の視点から、人間生活における個々人の日常的行為と生活の諸条件の相互作用について、自然・社会・人文の諸科学を基盤として研究し、持続可能な社会の創造に貢献する実践的総合科学である。天野正子先生が描いた5つのリカレント社会①食が結ぶ都市と農業との共生型②男女共同参画型③環境循環型④福祉循環型⑤ライフサイクルリカレント型をもとに考察した。

3. なぜ自分流儀の生活者だったのか

—家政学的発見KVAアプローチの継承—

例年卒業研究が佳境に入る頃に、卒業研究で先がみえず唸っていると突然に「わかった」という実感を得ることを学生は「神さまがおきてきた」呼ぶ。自分流儀の研究になる私自身も多くの先生と出会い「わかった」経験が舞い降りることを期待して生活研究を続けてこられた。

もちろん、社会科学に限らず自然科学人文科学どの学問領域の研究にも特別な「わかった」という発見の瞬間があるが、日常生活に根ざす家政学にとって、なかでも知識（K）や技術（A）を徳性（V）としてきた東京家政学院の実践的家政教育をもとにした自分自身の経験にもとづく肌感覚の「わかった」は教員としての醍醐味、実感ある生活研究の核（生活者視点の研究アプローチ）であった。

2023年2月17日の公開授業では、38年間東京家政学院大学教員として家政学原論・家庭経済学・家庭科教育法などを中心に教鞭をとり、上村ゼミ歴代学生と院生の方へ413+12=425回の感動的「わかった」に立ち会わせて頂いたことに心からの感謝をこめて、「わかった」を大事に生活と人生をつくってきた卒業生へのメッセージとして『自分流儀の生活者の時代』と題する授業を行った。

カムバックアゲイン 東京家政学院における、自分流儀の生活創造アプローチが継承・発展していくことをこころから祈念している。短期大学非常勤講師時代を含め43年間ありがとうございました。

参考文献 上村 協子, 亀高 京子 東京家政学院における家政学原論 家政学原論研究/42 巻 (2008) / 2008 年 42 巻 p. 182-187



写真1 展示報告書

東京家政学院大学 大学教育高度化推進特別経費事業 報告書

- ①総合家政の知を活かした国際協力のための教育方法の開発 2005 年度
- ②生活主体形成のための金融教育ライフマネジメントプログラム 2006 年度
- ③生活主体形成のための金融教育ライフマネジメントプログラム 2007 年度
- ④現代家政学視点による消費者教育の体系化 2008 年度
- ⑤現代家政学視点による消費者教育の体系化 2009 年度
- ⑥現代生活学セミナー 大学における消費者教育を考える
—生産消費者の育成— 2010 年 10 月 2 日

科学研究費報告書

- ⑦相続に見る女性と財産 (2002-2003)
- ⑧女性農業者の資産形成とソーシャル・キャピタル (2005-2007)
- ⑨生活文化の世代間伝承による持続可能な消費
—消費者教育のパラダイムシフト— (2011-2014)
- ⑩現代生活学研究～生活者がつなぐ食（消費）と農（生産）～ (2017-2019)



写真2 『自分流儀の生活者の時代』の展示風景・展示書籍

ダニエル・ドライリンガー著 上村協子・山村明子
監訳『家庭の中から世界を変えた女性たち—アメリカ家政学の歴史』東京堂出版 他

上村協子（旧姓 福田） 略歴

熊本県立熊本高校卒業

お茶の水女子大学家政学部家庭経営学科卒業

お茶の水女子大学大学院家政学研究学科修了 家庭
経営学専攻修士

昭和60年4月東京家政学院大学家政学部専任講師

東京家政学院大学、家政学部助教授 大学院人間
生活学研究科併任
家政学部（現代生活学部）教授、
家政学部長、副学長

令和5年2月現在 東京家政学院大学 現代生活学
部 現代家政学科教授
大学院人間生活学研究科家政学
専攻主任

学外での活動

学会活動 国際ジェンダー学会

第8期 会長

（一社）日本家政学会生活経営学部会
部会長

生活経済学会

第18期・第19期・第20期会長

令和5年2月現在 社会貢献活動

金融広報中央委員会 学識経験者委員

金融経済教育推進会議委員

文部科学省消費者教育推進委員会委員長

明治安田生命保険相互会社評議員

西武信用金庫非常勤理事

<VI 展示研究報告 (6) >

展示協力報告

川本 利恵*

令和4年度 KVA祭「東京家政学院のあゆみ」展

令和4(2022)年11月12日(土)に、大学と光塩会の共催で標記の展示が開催された。総務室が担当となり、当館から1名が協力者として展示に携わった。

昨年、一昨年とKVA祭が中止となっており久々の開催となったが、当初土・日の2日間の予定が、いまだコロナ禍の折ということで土曜日一日のみとなった。

会場はカフェテリアで、窓側に沿ってボードを一列に並べて、会場を取り囲むような形式にし、椅子と机はそのままにして来客者の休憩場所として利用してもらうことにした。

構成は当館で検討した。タイトルと大江スミの写真(写真1)、大学のあいさつ文、創立者大江スミと学院の年譜、写真パネルを使った大江スミの学院創立までの生い立ち(写真2)、さらに学院の校舎や授業風景の写真パネル(写真3)、建学の精神の解説(写真4)、活躍する卒業生のパネル展示(写真5)である。

準備・片付けは総務室の職員と当館から1名が行った。



写真2 大江スミの生い立ち



写真1 入口の様子



写真3 授業風景写真

*川本 利恵(かわもと りえ) 令和4年度生活文化博物館学芸員

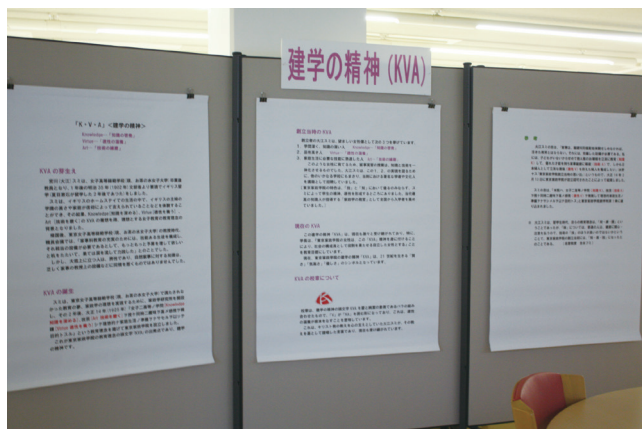


写真 4 建学の精神



写真 5 活躍する卒業生紹介

<Ⅶ 博物館実習報告>

令和5年度博物館実習の実施について

加藤 晴美*

1. はじめに

本学においては、現代生活学部生活デザイン学科および現代家政学科の学生を対象として、学芸員資格の取得を目的とした学芸員課程を開設している。そのまゝとめとして開講される「博物館実習」は4年次生を対象とし、前期に実施される「学内実習」、集中授業として町田キャンパス生活文化博物館において行う「館園実習」、都内および都内近郊の博物館等で実施する「見学実習」から構成される。令和5（2023）年における博物館実習は、生活デザイン学科（町田キャンパス）4年生5名、現代家政学科（千代田三番町キャンパス）4年生7名および科目等履修生1名の合計13名が履修した。

本報告では、令和5年9月4日（月）から8日（金）までの5日間、生活文化博物館において実施した「館園実習」の経過と、その成果である実習生展示の概要について報告する。

2. 館園実習の概要

令和5年度における館園実習は、生活文化博物館における模擬的な展示の企画・制作を課題とし、生活デザイン学科および現代家政学科の博物館実習履修生が合同で実施した。なお、現代家政学科に所属する学生のうち5名は自宅が遠方のため、実習期間中は町田キャンパスに併設されたセミナーハウスに宿泊した。実習の指導は筆者が中心となり、その事前準備および実習期間中には生活文化博物館の川本利恵学芸員の全面的な協力を得た。また、今年度の実習では、本学が所蔵する特殊コレクションである大江文庫資料への理解を深めることを目的として、江原絢子名誉教授らにご協力いただき、大江文庫についての解説と資料の閲覧を行った。以下、第1日目から最終日までの、実習の経過について報告する。

第1日目午前は、教室におけるガイダンスを実施し、

実習生13名を3つの班に編成した。その後、生活文化博物館の概要について川本学芸員による解説があり、さらに川本学芸員の案内により展示室および収蔵庫を見学した。実習生らは博物館の収蔵庫を初めて見学したという者が多く、興味深く見学を行ったようであった。

午後からは江原名誉教授、関原元図書館部長による大江文庫についての解説、続いて図書館において資料の閲覧を行った。まず、関原氏から大江文庫の成立やその趣旨についての説明を受けたのち、江原名誉教授による所蔵資料に関する講義が行われた。ここでは大江文庫所蔵資料のうち、生産・加工にかかわるものや、『養生訓』などの健康・病気にかかわるもの、行事・行事食にかかわるものなどが紹介された。また、『豆腐百珍』などの百珍物、『料理早指南』、『素人包丁』など江戸時代の料理書から判明する食文化についての解説があり、江戸時代の料理の復原と、生活文化博物館におけるこれらの料理の標本化の取り組みについても言及された。

講義ののち、実際に図書館において大江文庫資料の閲覧を行った。ここでは『日本山海名産図会』や『五畿内産物図会』など、地域の生産・加工の状況を描いた資料や、名所案内、江戸切絵図など、地域の景観を知ることのできる資料などを閲覧した。近世期の資料を初めて手に取ったという実習生も多かったが、『五畿内産物図会』のコミカルな絵などを実際に見ることによって、遠いと思っていた江戸時代が身近に感じられたといった感想もあり、実習生にとって貴重な経験となった。

第2日目午前より、実習生らによる展示企画とそれを実現するための調査・研究を開始した。まず講義によって展示企画の立て方を概説し、引き続いて各班で展示企画の検討に入った。また、千代田三番町キャンパスから参加した実習生に対しては、地名辞典や自治体史、各種地図資料など、図書館における基礎文献等

*加藤 晴美（かとう はるみ） 令和4年度現代生活学部現代家政学科准教授

の所蔵状況などを紹介した。

実習生らはA班（生活デザイン学科）、B班・C班（現代家政学科）に分かれ、インターネットや図書館での調査などを活用し、テーマ案を絞り込んだ。テーマが決定した班から展示のための調査に移った。決定した展示テーマは、A班が「『相原』は東京か？ 神奈川か？」、B班が「番町・麹町周辺の変遷」、C班が「キッチン革命～主婦のあこがれた調理器具～」である。展示の詳細については後述するが、A班・B班の展示企画は自分たちが学生生活を過ごしてきたキャンパス周辺地域を素材としたものであり、C班はこれまで学んできた家政学の知識を活かしつつ、生活文化博物館所蔵の調理器具を調査、展示の対象として活用した。また、B班は大江文庫所蔵の江戸切絵図を活用するなど、実習生自身の生活体験や、本学が所蔵する資料などを活用した展示企画となった。

第2日目午後から第3日目午前を中心に、展示のための調査を行った。A班は図書館での文献収集と、境川周辺でのフィールドワークを分担して行い、B班はインターネットを活用した情報収集を行うとともに、地形図の読図、大江文庫所蔵「江戸切絵図」の撮影などを実施した。C班は、生活文化博物館において川本学芸員からの聞き取り調査を行い、さらに所蔵資料である調理器具を撮影させていただいた。また、撮影した各調理器具については図書館での文献調査などを行った。

第3日目午後から第4日目にかけては、引き続き展示内容についての調査を行うとともに、解説文の原稿作成やパネルのレイアウトの考案、パネル作成に取り掛かった。ハレパネ（スチレンボード）による展示パネルの制作方法、パネルのサイズや文字のフォント・サイズについては川本学芸員の指導を受けた。解説文の原稿作成は、正しい情報をわかりやすく表現するようにこころがけた。また、写真や図表の印刷も並行して行い、展示パネルを作成した。生活デザイン学科の学生のなかには建築模型の作成などでスチレンボードの取り扱いに慣れている者もあり、彼女らが苦戦する現代家政学科の学生をサポートするなど、このころには所属学科を超えて学生同士の協力体制が自然にできていった。慣れない作業に苦戦することも多く、何度も修正を行ったが、いずれの班もうまく役割を分担することができたため、効率よく作業を進めることができた。

第5日目には作成したパネルの列品作業を実施して展示を完成させ、各班によるギャラリートークを行う予定であったが、この日の朝、台風による大雨警報が

発令された。そのため学生の安全を考慮してセミナーハウスに宿泊していたB班の実習生のみ予定通り作業を実施し、A班およびC班については翌週、改めて展示作業とギャラリートークを実施した（写真1、2、3）。



写真1 A班によるギャラリートーク

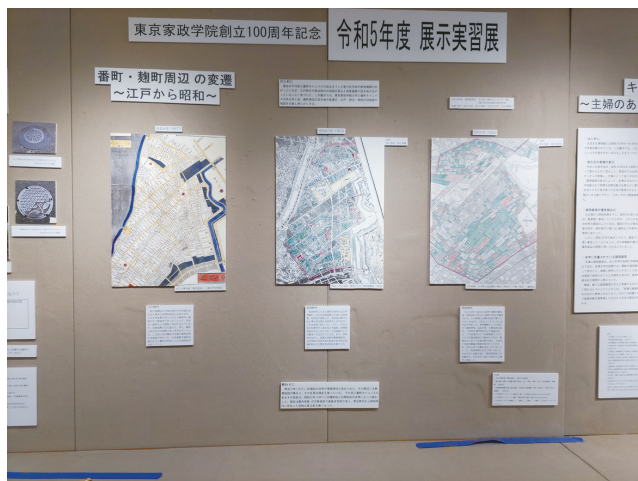


写真2 B班による展示



写真3 C班による展示作業

3. 展示内容

各班の展示内容は下記の通りである。

(1) A班:「相原」は東京か? 神奈川か? (町田キャンパス・生活デザイン学科4年 江成香音・李卉晴・金岡 杏紗湖・澤田紫月海)

町田キャンパスは東京都町田市「相原」に位置している。しかし地形図を眺めていると、神奈川県相模原市にも大字として「相原」の地名が存在することに気づいた。本展示は、なぜ「相原」が東京都と神奈川県の両方に存在しているのかを、文献とフィールドワークによって調査・展示したものである。

調査の結果、以下の経緯が明らかになった。中世において現在の東京都町田市大字相原および神奈川県相模原市緑区大字相原付近は栗飯原と呼ばれていたという。その後、文禄3(1594)年の洪水を機に町田キャンパスの近くを流れる境川が武蔵国と相模国の国境とされ、武蔵国相原村と相模国相原村に二分された。現在の「東京都町田市相原」は、江戸時代には上相原村・中相原村・下相原村に分村され、明治8(1875)年に神奈川県相原村となった。明治22(1889)年には隣村である小山村と統合され堺村が成立し、明治25(1892)年には東京府へ移管された。現在の町田市相原となったのは、町田町・鶴川村・忠生村・堺村が合併して市制が施行された昭和33(1958)年である。

A班の展示では、上記の流れを示した年表のほか、明治・昭和戦前期・平成の3つの時期の地形図や、境川周辺におけるフィールドワークによって発見した、東京の「相原」と神奈川の「相原」を示す痕跡を撮影した写真などによって構成された。写真は境川にかかる「二国橋」(武蔵国と相模国の国境であったことを示すもの)や、相模原市と町田市の花がそれぞれ描かれた2つのマンホール、東京都相原との住所表示がある電柱、神奈川県相原との住所表示がある自動販売機などを撮影したものであり、それらの所在地を地形図上に示すことによって、境川が2つの「相原」の境目になっていることを視覚的に表現した。また、「相原は東京か神奈川、どっち?」として、本展示を見る前に「相原」が東京都か、神奈川県のいずれかと思っていたかを尋ね、思っていた方にシールを貼ってもらうという、見学者参加型の展示を考案した。

実習生が4年間通学し、生活してきた身近な地域である「相原」を素材とし、かつ境川周辺におけるフィールドワークでは観察力を発揮して、東京・神奈川双方の「相原」を表示するさまざまな痕跡を発見した。また、見学者参加型の展示などを考案するなど、さまざまな工夫がなされた展示となった。

(2) B班:「番町・麴町周辺の変遷」(千代田三番町キャンパス・現代家政学科4年 佐藤史佳・水谷優美子・末吉由佳・生天目結衣・田村実穂)

B班の実習生が学生生活をおくる千代田三番町キャンパス周辺は、現在ではオフィス街や住宅地、商業地となっている。千代田三番町キャンパスにおいて前期に実施した学内実習では、江戸時代の切絵図や現在の地形図を見ながらキャンパス周辺を歩くという巡検を実施しており、その際の経験から地域の変化に関心を持った。そのため、さまざまな時代における当該地域の絵図・地図を示すことによって地域変化を示すことを企画した。具体的には、大江文庫所蔵の市ヶ谷周辺を描いた切絵図、明治後期の地形図、図書館所蔵の昭和初期の商工地図(「大日本職業別明細図」)といった絵図・地図資料を活用した展示を企画した。

B班の展示では安政4(1857)年の「番町絵図」(大江文庫所蔵『御江戸切絵図』)、明治42(1909)年の1万分の1地形図「四谷」、昭和5(1930)年の商工地図を展示し、それらの比較と文献調査によって、江戸時代から昭和初期までの三番町キャンパス周辺地域がどのように変化してきたのかを示した。

展示では、幕末期の番町周辺に江戸城の西の守りを固めるために配置された旗本らの武家屋敷が集中していたことをまず示した。その後、明治期には旗本らが江戸を離れ、広大な武家屋敷に空地が増加したこと、一方で皇居至近という利便性の高い立地のため、皇族や政府高官、財界人、文化人など上・中流階級の人びとが居住するようになったほか、まとまった空地を活用し、教育機関や大使館、軍関連施設なども開設されたことを述べた。昭和5年の商工地図には施設名・店舗名や居住者の氏名もみることができ、現在地に移転する以前の「東京家政学院」の名が、現在の三番町キャンパスの向かい側にあることも発見した。

B班もA班同様、自分たちにとって身近な地域の特徴や成り立ちに関心に向け、絵図や地図といった資料を視覚的に示すことができた。キャプションの少なさなど、分かりにくい点も若干あったが、自らの生活体験やそれまでの授業での経験からテーマを企画し、切絵図や地形図などの資料を取り入れ、積極的な調査を実施することができた。

(3) C班:「キッチン革命～主婦のあこがれた調理器具～」(千代田三番町キャンパス・現代家政学科4年 長尾侑果・藪中まり子・科目等履修生 柴山里子)

C班による展示では、高度経済成長期以降における調理器具の変遷をキッチンの「革命」としてとらえた

展示を企画した。C班は当初、本学における調理実習の特徴とその変遷をテーマの候補としていたが、生活文化博物館の所蔵資料のなかに昭和30、40年代の調理器具が含まれていることを知り、これらを資料として活用したいと考えた。そのため、調理器具や調理方法の変遷に関する文献調査と生活文化博物館における聞き取り調査、資料の撮影などを行った。

高度経済成長期に入り、日本人の生活は大きく変化した。食に関する空間も変化し、住宅には台所と食事室を兼ねたダイニングキッチンが登場して主婦のあこがれとなった。昭和30年代後半には電気やプロパンガス、都市ガスが都市部だけではなく村落部にも普及し、ガスや電気を使用した炊飯器や鍋など、新たな調理器具が次々に発売された。これらの調理器具は調理の負担軽減や新たな料理方法の考案につながり、食に関する新しいライフスタイルが生まれた。

本展示では、本学短期大学調理研究室に旧蔵され、かつて調理実習で見本として見せたり、実際に使用されていたりした調理器具（生活文化博物館所蔵）の写真を撮影し、パネル化した。具体的にはターンオーバー式トースター、電気釜（電気自動炊飯器）、万能片手鍋、電子レンジ（カプセルレンジ）などである。各調理器具の機能などについても文献で緻密に調査し、調理器具の変化が食にまつわる人びとの「暮らし」を大きく変えたことをわかりやすく示すことができた。

4. おわりに

館園実習は5日間という短い期間で企画の立案から調査・研究、解説原稿の執筆からパネル作成などを行わねばならず、実習生にとっては慌ただしい実習に

なった。実習期間中、セミナーハウスに宿泊した学生が5名いたが、残暑のなか慣れない環境で寝泊まりし、体調不良になる学生もみられた。また、著者にとっては本学着任後、初めての単独での実習指導であり、経験不足から学生への指導が不十分であったと感じられる部分も多い。そのようななかでも実習生らは、これまでの経験からオリジナリティのある企画を立案し、フィールドワークや文献調査、聞き取り調査などから充実した展示が完成した。いずれの班にもリーダーシップをとることのできる学生がおり、班内でうまく役割分担して協働できたことが大きい。また、実習期間のなかば以降、町田と千代田三番町というキャンパスの壁を越えて、学生同士で情報を共有したり、作業が遅れ気味の班を別の班の学生がフォローしたりするなど、実習生全体で協力し合い、展示準備を進めることができた。

また、本年度の館園実習では、川本学芸員や江原名誉教授、図書館の方々のご協力を得て生活文化博物館および大江文庫の所蔵資料を活用することができたことも成果の一つであった。これらは本学における貴重な財産であるが、人文学部が廃止された現在では学生らがこれらの史資料に親しむ機会は少なくなっている。これらの資料のなかには本学の歴史を示すものや、人びとの暮らしとその変遷を知ることのできるものが多数含まれており、学芸員課程ではこれらの資料に触れる機会を増やし、積極的に活用したいと考える。来年度以降も生活文化博物館において館園実習を実施する予定であるが、これらをより活用した展示が実現できるようにしたい。

令和4年度 生活文化博物館日誌抄（2022：4/1－2023：3/31）

2022年

- 4月 3日（土）大学・大学院入学式
- 8日（金）寄贈資料搬入
- 22日（金）「学生成果展」・「教員研究成果展」閉幕
- 28日（木）都立町田総合高校新1年生見学
- 5月 2日（月）神奈川県立津久井高校新1年生見学
- 30日（月）「第13回企画展」開幕
- 6月 5日（日）オープンキャンパス開催
- 7日（火）特別展借用資料搬入
- 8日（水）「東京家政学院を学ぶ」授業内博物館見学
- 16日（木）令和4年度 第1回博物館委員会
- 7月 6日（水）全国博物館長会議オンライン視聴
- 10日（日）オープンキャンパス
- 29日（金）「第13回企画展」閉幕
- 8月 1日（月）東京国立博物館キャンパスメンバーズ入会
- 7日（日）オープンキャンパス
- 20日（土）オープンキャンパス
- 9月12日（火）～16日（金）館園実習 実習生8名
- 20日（火）「第14回企画展」・「展示実習展」開幕
- 10月21日（金）「第14回企画展」・「展示実習展」閉幕
- 25日（火）「第34回特別展」パネル展示開幕
（於：千代田三番町キャンパス）
- 30日（日）オープンキャンパス
- 11月 7日（月）「第34回特別展」本展示開幕
- 12日（土）KVA祭開催
- 30日（水）高大連携会議参加者見学
- 12月 2日（金）令和4年度 第2回博物館委員会
- レースミュージアム「LOOP」ヘクンス
トレース絵1点貸出
- 14日（水）株式会社ポストウェイ取材
- 15日（木）レースミュージアム「LOOP」よりク
ストレース絵1点返却
- 23日（金）仕事納め

2023年

- 1月 6日（金）仕事始め
- 「町田ショッパー」（株式会社ポストウェ
イ）に特別展記事掲載
- 1月23日（月）「定年時代」（朝日新聞社）に特別展記事
掲載
- 2月 3日（金）「第34回特別展」パネル展示閉幕
（於：千代田三番町キャンパス）
- 「第34回特別展」本展示閉幕
- 6日（月）「第34回特別展」パネル展示片付け
（於：千代田三番町キャンパス）
- 20日（月）「学生成果展」・「教員研究成果展」開幕
- 3月19日（日）卒業式
- 20日（月）日本教育新聞掲載
- 24日（金）レースミュージアム「LOOP」ヘクンス
トレース絵1点貸出
- 26日（日）オープンキャンパス
- 31日（木）『博物館年報』第32号発行

東京家政学院生活文化博物館規程

(総則)

第1条 この規程は、東京家政学院大学学則第6条3項に基づき定める。

(目的)

第2条 東京家政学院生活文化博物館（以下「博物館」という。）は、東京家政学院大学（以下「本学」という。）における生活文化に関する教育・研究に必要な実物資料その他の資料を収集、保管、展示し、本学の教職員及び学生の利用に供するとともに、教育的配慮のもとに一般に公開することを目的とする。

(所在地)

第3条 博物館は、東京都町田市相原町2600番地に置く。

(館長及び職員)

第4条 博物館に博物館長（以下「館長」という。）、研究員（学芸員を含む。）、情報化推進室の職員を置く。

- 2 館長は、博物館の業務を掌理し、業務遂行に伴う事務について総括する。
- 3 館長の選出は、東京家政学院生活文化博物館長選考規程の定めるところによる。
- 4 研究員（学芸員を含む。）は、博物館の業務についての専門的事項をつかさどる。
- 5 研究員（学芸員を含む。）は、館長が委嘱する。
- 6 情報化推進室は、博物館運営の事務を整理する。

(委員会)

第5条 博物館の運営に関する重要事項を審議するため、博物館委員会（以下「委員会」という。）を置く。

- 2 委員会に関する事項は別に定める。

(運営規程)

第6条 博物館の運営に関する具体的事項は別に定める。

(事務)

第7条 博物館業務の事務は、情報化推進室生活文化博物館事務担当が行う。

附 則

この規則は、平成2年4月1日から施行する。

附 則

この規則は、平成3年2月25日から施行する。

附 則

この規則は、平成7年4月1日から施行する。

附 則

この規則は、平成22年4月1日から施行する。

附 則

この規則は、平成23年4月1日から施行する。

附 則

この東京家政学院生活文化博物館規則は、東京家政学院生活文化博物館規程に改正し、平成27年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成30年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、令和4年4月1日から施行する。

東京家政学院生活文化博物館委員会規程

(趣旨)

第1条 この規程は、東京家政学院生活文化博物館規程第5条第2項の規定に基づき、生活文化博物館委員会（以下「委員会」という。）に関する事項を定める。

(審議)

第2条 委員会は、次の各号に定める事項を審議する。

- (1) 運営に関する基本的な事項
- (2) 施設の管理に関する重要な事項
- (3) 資料の収集、保管及び展示に関する重要な事項
- (4) 公開事業に関する重要な事項
- (5) 年報に関する事項
- (6) その他学長の諮問する事項

(構成)

第3条 委員会は、次に掲げる者をもって構成する。

- (1) 生活文化博物館長（以下「館長」という。）
- (2) 学芸員教育委員会委員長
- (3) 各学科及び研究科から選出された教員 6名
- (4) 学長が指名する副学長 1名
- (5) 館長が指名する生活文化博物館研究員 若干名
- (6) 学長が指名する事務職員 2名

2 委員会は、委員以外の本学教職員又は学外の学識経験者を委員会に出席を求め、意見を聴くことができる。

(委員の任期)

第4条 前条第1項第3号、4号及び6号に規定する委員は、学長が委嘱し、その任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。

また、前条第1項第5号に規定する委員は、館長が委嘱し、その任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。

2 欠員を生じた場合の後任の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(委任)

第4条の2 委員会に出席できない委員は、委任状を提出することができる。

2 委任状を提出した委員は出席とみなす。

(委員長)

第5条 委員会に委員長を置き、館長をもって充てる。

2 委員会は、出席委員と委任状を提出した委員の合計が委員の2分の1以上でなければ会議を開くことができない。

3 委員長は委員会を招集し、その議長となる。

4 委員長に事故あるときは、あらかじめ委員長の指名する委員がその職務を代行する。

(専門部会)

第6条 委員会は、資料収集その他専門的事項について協議させるため、各種の専門部会を置くことができる。

2 専門部会に関する事項は、館長が定める。

(事務)

第7条 委員会の事務は、情報化推進室生活文化博物館事務担当が行う。

附 則

この規程は、平成2年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成9年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成12年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成13年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成19年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成22年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成23年4月1日から施行する。

附 則

この東京家政学院生活文化博物館運営委員会規則は、東京家政学院生活文化博物館運営委員会規程に改正し、平成27年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成27年4月23日から施行する。

附 則

1 この規程は、平成30年4月1日から施行する。

2 委員会構成員のうち、各学科から選出委員については、改組に伴う移行期間学科の状況を考慮し委員会で審議する。

附 則

この規程は、令和4年4月1日から施行する。

東京家政学院生活文化博物館運営規程

第1章 総則

(目的)

第1条 この規程は、東京家政学院生活文化博物館（以下「博物館」という。）規程第6条の規定に基づき、博物館の運営に関する具体的事項を定める。

(用語の定義)

第2条 この規程における用語の定義は、次の各号による。

- (1) 施設とは、本学の施設のうち、博物館用に充てられる次の施設をいう。
 - ア 専用施設（専ら博物館用に充てられる建物、室又は屋外施設）
 - イ 共用施設（専用施設以外の施設であって、その全部又は一部を長期若しくは一時的に博物館用に充てられる建物、室若しくは屋外施設）
- (2) 資料とは、博物館が保管する次の資料をいう。
 - ア 実物及び標本
 - イ 模写、模型及び複製
 - ウ 文献及び図表
 - エ 音響・映像資料
 - オ その他生活文化に関する資料
- (3) 開館とは、資料の展示された専用施設又は共用施設を開放することをいい、閉館とは、それらを閉鎖することをいう。
- (4) 公開事業とは、博物館の実施する次の事業をいう。
 - ア 常設展示（一定の資料を常時展示すること。）
 - イ 特別展示（特別の目的により選定した資料を期間を限って展示すること。）
 - ウ 講演会、講習会、映写会、研究会その他の行事を公開すること。
 - エ 出版物を作成し、及び頒布すること。

第2章 開館及び閉館

(開館日及び閉館日)

第3条 開館日及び閉館日は次のとおりとする。

- (1) 博物館は、学則に定める休業日を除き、原則として開館するものとする。
- (2) 休館日は東京家政学院大学学則（以下「大学学則」という。）第15条の定める日曜日、国民の祝日に関する法律（昭和23年法律178号）に規定する休日、創立記念日（5月21日）春季休業（4月1日から4月7日まで）夏季休業（8月1日から9月20日まで）冬季休業（12月26日から翌年1月7日まで）とする。
- (3) 大学学則第15条の定める日のほか、館内整理、陳列替え、資料補修、ばく書その他特別の事由があるときは、その都度閉館する。

(開館時間)

第4条 開館時間は次の通りとする。

- (1) 平 日 9時30分から16時30分まで（入館は16時まで）
- (2) 土曜日 9時30分から11時30分まで（入館は11時まで）

(特別の開館)

第5条 館長は特別の事由のあるときは、期間を限って、前2条の規定にかかわらず開館の日及び時間を別に定めることができる。

(館内規律)

第6条 博物館の利用者は、次の行為をしてはならない。

- (1) 資料を汚損し、又は傷つけること。
- (2) 静粛を乱すこと。
- (3) 係員の指示に従わないこと。
- (4) その他館長の指示する禁止事項に反すること。

(入館料)

第7条 入館は、原則として無料とする。ただし、特別の公開事業に際して閲覧料・聴講料等を徴収することができる。

第3章 資料の収集及び管理

(管理事務責任者)

第8条 資料の収集・管理を適正円滑に行うため、管理事務責任者を置き、情報化推進室長がこれにあたる。

(資料の収集)

第9条 資料の収集は、購入、受贈、受託、借入又は学内における制作によるものとする。

2 収集する資料の決定は、博物館の目的、整備計画及び予算を考慮し、資料収集専門部会の議を経て館長が行う。

(受贈・受託)

第10条 館長は、資料を寄贈又は寄託しようとする者があるときは、資料収集専門部会の議を経てこれを受け入れることができる。

(会計上の区分)

第11条 購入又は受贈した資料の会計上の区分は、次のとおりとする。

- (1) 固定資産とするもの（本条第2号に掲げるものを除く資料）
- (2) 消耗品とするもの
 - ア 教材用資料（将来固定資産とするものを除く。）
 - イ 逐次刊行物（将来固定資産とするものを除く。）
 - ウ 事務用資料
 - エ 長期保存を必要としない資料

(資料の価格)

第12条 購入又は受贈した資料の取得価格は、次のとおりとする。

- (1) 購入した資料は、購入価格
- (2) 受贈した資料は、定価又はその評価価格
- (3) 学内において制作された資料は、それに要した実費価格

(資料の発注)

第13条 資料の発注は、所定の手続きによる。

(検収)

第14条 資料を受け入れる際は、納品書及び注文書控等により確実に検収しなければならない。

(登録)

第15条 第11条第1号により固定資産とする資料は、所定の標識を付し、資料原簿に登録する。

(点検)

第16条 固定資産である資料の点検は、定期的に又は必要に応じて行う。

(除籍)

第17条 特に館長が除籍を必要と認めた資料は、所定の手続きにより除籍する。

第4章 資料の利用

第18条 次の各号の一に該当する者は、館の資料を利用することができる。

- (1) 本学の教職員
- (2) 本学の学生
- (3) その他館長が許可した者

(資料の展示、閲覧)

第19条 博物館の保管する資料は、所定の場所に展示し、公開して閲覧に供することを原則とする。

(展示されていない資料の閲覧)

第20条 館長は、次に掲げる者に限り、展示されていない資料について、条件を付して閲覧させることができる。

- (1) 本学の専任教職員
- (2) 館長が特に許可した者

(館外における使用)

第21条 館長は、次に掲げる場合は、特に支障のない資料について、館外において使用することを許可することができる。

- (1) 本学の教職員が教育・研究のため、所属の組織の長の承認を経て、資料の学内における使用を願い出た場合。ただし、期間は1年以内とする。
 - (2) 本学の教職員が教育・研究のため、所属の組織の長の承認を経て、資料の学外における使用を願い出た場合。ただし、期間は3か月以内とする。
- 2 館長は、使用者が特別の事情により前項の規定による使用期間の更新を願い出た場合は、条件を付してこれを許可することができる。

(貸付)

第22条 館長は、次に掲げる場合は、資料の貸付を、期間その他の条件を付して許可することができる。

- (1) 資料の制作者が、その資料の貸付を願い出た場合
- (2) 資料の寄贈者が、その資料の貸付を願い出た場合
- (3) 他の博物館又は博物館に相当する施設が資料の貸付を願い出た場合
- (4) その他特に必要と認めた場合

(撮影、模写、模型又は複製の制作)

第23条 館長は、次に掲げる場合は、資料の撮影、模写、模型又は複製の制作を、条件を付して許可することができる。

- (1) 本学の教職員が願い出た場合
- (2) 本学の学生が、教員の承認を経て願い出た場合
- (3) その他特に必要と認めた場合

(出版、放送)

第24条 館長は、出版又は放送のために資料を使用することを願い出た者には、条件を付してこれを許可することができる。

(使用の停止)

第25条 館長は、第21条から前条までに至る規定による使用の期間中において、その資料につき必要があると認めるときは、本館職員をして調査させ、使用の停止、期間の制限、許可の取消等、必要な処置を講ずることができる。

(著作権に関する責任)

第26条 資料の使用により生ずる著作権法に定められた責任は、すべて利用した者が負うものとする。

(亡失等の弁償)

第27条 資料を損傷又は忘失した者は、法令の定めるところにより、損害を弁償しなければならない

(通用細則)

第28条 この規程の運用にあたり、必要な細則は別に定める。

附 則

この規則は、平成2年4月1日から施行する。

附 則

この規則は、平成3年2月25日から施行する。

附 則

この規則は、平成7年4月1日から施行する。

附 則

この規則は、平成22年4月1日から施行する。

附 則

この東京家政学院生活文化博物館規則は、東京家政学院生活文化博物館規程に改正し、平成27年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成30年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、令和4年4月1日から施行する。

東京家政学院生活文化博物館年報 第33号

2024年3月25日 印刷

2024年3月29日 発行

発行者 東京家政学院生活文化博物館
〒194-0292 東京都町田市相原町2600番地
電 話 042-782-9814

印刷者 株式会社 相模プリント
〒252-0144 神奈川県相模原市緑区東橋本1-14-17
電 話 042-772-1275

TOKYO KASEI GAKUIN
THE MUSEUM OF DAILY LIFE

※本号の編集は、編集員である井澤尚子、高尾純宏、立川泰史（生活文化博物館館長）、川本利恵が担当し、込山弥彦（情報化推進室長）と久保準一（情報化推進室主幹）が補佐した。

